川柳の雑誌

麻生路郎★主宰

最高權威の月刊柳誌

人生勉强の標識燈

本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十四年七月十五日發行　第十六卷第七號（毎月一回十五日發行）

★兵士は戰線に！　我等は銃後に!!　（國民精神總動員）

14/7

186

第十六卷　第七號

毎月十五日發行

川柳雑誌

八月の會

2日 7時 夜（水）

★會場　督得寺（電話南四八八六）
市電清水町電停一丁北ノ辻西入

★兼題　「鉛筆」（三句）……麻生路郎選
「撒水車」（三句）……橋本緣雨選
（前月句會の句中より）……麻生路郎

★講評　千日前に就て……高橋かほる
永田里十九

★會費　三〇錢（川協章提示の方は二五錢）

★景賞　天位（各題）に粗品を贈る。
幹事・豆秋・潮花・八九滿・斗風・榮香・いわを・里十九

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六（昭和ビル）
川柳雑誌社
電土佐堀三三三三・八一六三・八一六四番

麻生路郎序　石井白面人編

川柳

人の一代

定價拾錢
送料三錢

★松坂倶樂部綜合展が生んだプランの一つ

★人間が生れて死ぬまでのありさまを全國川柳人の句を藉りて表現した句集で、それ等の一句一句が讀者の胸奥に迫まつて川柳なるかなと感嘆させられる好著である。

堺市出島町三五一
發行所　不朽洞
振替大阪三〇三九二

アサヒビール
大日本麦酒株式會社

君と僕
そして
ビールと
櫻ン坊

路郎

麻生路郎著

新川柳評釋

★戰線への慰問品は
隨分御苦心なさいます。何處をどう廻つて行くか。幾日かかるか豫定がつかないので、毀はれ易いもの、腐敗するものは全然駄目です。その點本書は斷然最適の慰問便として戰地で喜ばれてゐます。即刻お送り下さい！

★定價　八拾錢　送料六錢

堺市出島町三五一番地
發行所　不朽洞
振替大阪三〇三九二番

北支の空へ

麻生路郎

——興亞記念日に北支を偲びて——

蘆溝橋以來晝寢のひまもなし
一文字山　雲の去來へ歩哨立ち
蘆溝橋・駱駝　平和はいつ來るぞ
兵隊の思ひ出　月の蘆溝橋
通州は曇り興亞の人柱
通州のうらみを知らず子は育ち
彈痕へ日本は遠し日本は遠し

514-7
一面

寫眞は昨秋●一文字山に於けるる
本社麻生主幹と岩崎柳路氏(右)

★川柳勇士の隨筆★

宣撫

南支　宮岡白峯

支那民衆へ東亞問題を論じても、何んと大きな事を云ひうもんだなァと云ふ樣な顏してゐる。もつとも山間部落民だからかも知れないが、大日本軍の我々は玉なす汗を流し、何百里もの征地へ駒を進めて、二周年に北、中、南支と、支那の至る處へ日章旗を揚げたにもかかはらず、一體支那人の何割が此の昭和聖戰を知つてゐるのかと思ふと全く心淋しく感ずる時もある。といふのは、我々日本兵を見て、且つ戰爭を見て、亦政變が起きてゐる位の程度にしか感じてゐない處があるのだ。一度私のゐる處で、附近部落の宣撫に行くと、亦政變がと訊く者が少なくない。曰く支那大滿洲の勢力は偉大なものだなんて、まだ滿洲事變を知らないのだ。ただ反蔣運動に滿洲人が廣東を占領してゐる位にしか見てゐない。日本軍だと稱して滿洲の軍隊が來たのだと、しきりに滿語を以て話してくるのには全くあきれる。あきれる日本兵よりも此の大戰爭で支那の重要都市が占領された事なんか知らないのだから氣樂なものだ。正直に南京、重慶、徐州、廣東、上海等の狀況を說明しても、ただ宣傳だ位の感じしか持つてゐないので、一度支那へでも來たものなら第一婦女子をやつつけて行く其の次は子供と云はず、大人と云はず殺して行くと云ふ樣な教育を受けてゐるのだから、良民を護りながら支那兵と戰つてゐる皇軍をどうしても日本兵とは見ないらしい。面白い事には朝のお互ひの言葉「お早う」と云ふ言葉を「朝飯を食つたか」と訊く。これが朝の挨拶なんである。それはどういふ意味かと云うと何時も政變などで內亂があり、兵火とか何んとか云うものになれてゐるので、何時政變が起つても、逃げる仕度はして置く必要がある。亦逃げるのには飯を食つたか」と云ふのだ。そこで部落は、大體一直線に通りぬけのやうになつてゐるし御飯時には皆店先きで食事をする習性となつてゐる。これは一一挨拶をしなくとも、熊さんも、馬さんも飯を食つてると云ふ事を一般に知つて貰ふ樣にしてゐるのだとの事である。

前述のやうな譯で日本人は相當力を入れてゐる此の日支事變も支那人にしてみれば左程大問題としてゐない。只ヨカンボーが下野する位の事に思つてゐるのである。蔣さんの逃場に困つてゐる事なんか知る術もない。それで私達の宣撫も彈を射つより以上に苦勞をする。近頃日本の兵隊は女を侵かさないし、亦良民を保護して呉れる、全く不思議な樣に思つてゐる位だ。最も當地は抗日の源と迄云はれた地だけあつて教育方面には相當日本の惡口を並べてゐるから無智な土民はさう思ふのも無理はないかも知れない。何もかも實地に指導をして且範を示して行く可きだと私は思つてゐる。

一刻も早く「金」を政府に賣り給へ！

（七月一日以後でも政府へ賣却出來る）

金の飾りは銃後の恥辱だ!!

で莫迦らしい時もある。絕體に日本軍が廣東へ來る筈がない樣に思つてゐるのと、亦一つは日本人其のものは鬼のやうな人種腹を造つて置く必要がある。其兵變に備へる第一項として、先づ飯を食て置く事なのである。それで「お早う」の代りに「君、

川柳雜誌　七月號　目次

表紙寫眞……（大同・石佛）……岩崎柳路
宣撫……宮岡白峯……（一）
櫻間青崖……岩本素人……（一〇）
川柳仁義（1）……高鷲亞鈍……（一〇）
街に住めば……高橋かほる……（一〇）
岡田某人　石井白面人　須崎豆秋　水谷鮎美　高戸田孤篷……（一四）
鷲奥麻生村丹路亞路鈍郎
渡邊曉童……（一〇）
川柳解題と例句……路郎編……（八）
「日の丸」制定當時の逸話……森半疊……（九）
「日の丸」餘話……石崎柳石……（九）
武玉川三篇研究（三）……森東魚……（四）
悔本秋の屋
蛭子省二
病床寸感……酒井斗風……（一〇）
貝釦……岡田某人……（一二）
近作柳樽……麻生路郎選……（六）
川柳塔……麻生路郎選……（二）
同舟近詠……渚家……（一二）
北支の空へ……麻生路郎……（一）
郊外……水谷鮎美選……（六）
一路集……煽風機……河野夜王選……（六）
各地柳壇……（一六）
後記……（表三）……社關係の人々……（表三）
柳界展望……（一三）
川・協……（一三）
川雜案內……（一二）
燈影座大阪公演……戶田孤篷
映畫「金毘羅船」……正木水客
角座を觀る……高橋かほる……（一二）
春秋座を觀て……水谷鮎美……（一二）
宵髯八人目の妻……姬田夕鮎……水谷鮎美

川柳塔

‖路郎選‖

大阪　高橋かほる

二軒茶屋草履も高うなりました
針金も買うて人妻忙がしく
座談會若手に任す事にする
肴屋の禮儀手かぎに氣付くなり

試寫見學

試寫らしく二室の方ゝ變はるなり
上着脱いで試寫の番組配るなり

大阪　奥村丹路

驛にゐて鄉愁に似し心もち
大阪の川の黑さを見る久し
義理ゝ云ふものゝさびしさ夏羽織
まだ契結ばぬふたり美しく
六月の陽にあかんぼゝ眼を細め
なにけなく覗く花屋の家の奥
町に住みある日親しき下駄の音
北濱でなか〳〵死なぬ人ゝ會ひ
考へが過ぎてさびしい疊の目
酒ゝ言ふふしぎなものを女房酌ぎ
空の果なぞあればゝてあればゝて
果物をむくたのしさを大切に
苺一箱あがなひきたり夜の夫婦
妻ゝ歩み夜店の町につきあたり
ジキルゝハイド一つは鏡にうつる顔

良子微恙（六句）

小兒科へ目方の足らぬ子を抱き
小兒科で雜多な下駄を見てあきれ
父ゝして診察室の暑きにゐる
診察のベットへむごし子は裸
子のための注射に白き母の腕
小兒科を親子三人見送られ

張家口　岩崎柳路

戰鬪帽通譯さんは胸を張り
背なの子の足ぶら〳〵ゝ夜店の灯
蒙古風旗も奥地へ宣撫班
署長室ソファもあれば額もあり

兵庫縣　寺井鋭々

おしぼりへ今日の暑さの顏を當て
歸省する如く登山家山へ行き
洋裝の連れの男はノーハット
白靴を踏まれた日腐る事多く

大阪　橋本綠雨

ちゝぬけた男のやうで儲けて居
戰線の寫眞でみんなで笑ひ
雨乞ひで水車も休み人もなし
陣中で星を數へた事を書き

○

名古屋　吉田水車

御禮の隣の札はこけたまゝ
提灯のやうにヂョッキを酌いでくれ
十五日双葉の腰を疑はず

大阪　妹尾八九滿

眞劍になつて吠えても小さい犬
ネクタイが醉うてる事を物語り
寢台車老父をたのむチップなり
善光寺夢ではないぞ父ゝ立ち
ハイカーを追ひ越すバスへシャンが居た

大阪　須崎豆秋

面白ろて安いあそびへついて行き
今朝はなんの日か坊んさんによく出逢ひ
アルミ貨がたもゝのくその中にゐた

大阪　後藤青兒

老人も石投げで見るハイキング
舟つけて陸戰隊の眞似をする
男の子產んで銃後の强い意氣
滔々ゝ捲して置いて淋しがり
合乘の愛のポーズをくだく權

南支　宮岡白峯

敵は足洗つた川の水ゝかや
宣撫班だけが話してゐる支那語
水牛も使ひ戰車も乘る兵士
慰問團防空演習の話しも出

大阪　正本水客

足袋少しきつく女は旅に出る
エプロンで都會を歩くこゝに馴れ
弔文を讀む夏の陽の眞下
爪赤くそめてトランク二つ提げ
龜飼ふてゐれば餘つ程ひまに見え
回診のおんなじ趣味へ腰をする

豊中　黑川紫香

白雲の影水すまし割つて逃げ
田植する徑へ遺骨の列つゞく
女房の留守へ飲む氣の友を連れ
寢つかれぬまゝに子供の頰をつき
云ひ過ぎを氣にした戻り石を蹴り

大阪　丸尾潮花

應接間不意のお客へあけ渡し
出勤の今朝は青葉の山を下り
初對面あの娘の母を眼に殘し
夕陽もう山の教會包みかけ

大阪　大阪形水

蜥蜴の戀光り二つになりて逃げ
蛞蝓も塩も溶けてる流元

玩具買ふほどの配當取つて來る
ブルジョアの息子の戀を待つ如し

大阪 岩橋双虎

珠算で解決できぬこゝができ
役人のペンを置かした風があり
蒼空へ欠伸を送る二階借
産業報國矢張りパンが先にくる

大阪 岡田某人

むら〳〵としてみたものゝ平社員
値段だけ聞くのは斜に身をひらき
無口たゞ自分の損へ笑ふのみ
働いてゐますと墓へ申し上げ
四十の戀は卷紙に書く
明窓淨机金の計算すべからず

たはむれの戀と云はせぬ目に出逢ひ
ソーダー水隣は戀のテーブルか
無爲無策八ツ手の花を見て暮し
生ビール皆喋つてる

兵庫縣 田邊由布

しあはせを感じまじろな障子みる
妻に似る娘十八よく太り
キヤラメルやグリコの紙の道じるし

大阪 北山悟郎

積極も消極も皆人の道
重役か知らぬが氣安い御仁だす

故各尾氏を偲ぶ

君想ふ寂しさ何時しか十七字

原家御慶事

國翼の廣さに雄蝶雌蝶舞ひ

兵庫縣 水谷鮎美

芝居好き子の頭をばはりたがり
晝の夢象牙のパイプさも重し
靴下は三十錢位ひ喫茶をのみ
醉へばさびしや候文で書おはり
雜草に寢ころぶ癖に生きてゆこ
恩給へ鮒や鮒や木の芽あえ
手拭を返すこゝろの日本人

出征 森山常葉君

ふるさとの空につゞいた支那の土

柳友 酒井斗風君入院

病院の窓夕やけて子をおもふ
退院のうへはジョッキを飲みたがり

同舟近詠

仁川 池田可宵

もう朝の煙が見える船世帶
妓生が一ときわ目立つ旗の波
故障車を見むきもしない夕霞
飼犬に嚙まれた例を伯母手眞似
男手の七輪少し悲壯なる
ウキンドの所詮手の出ぬものなれど

兵庫縣御影町 長崎柳秀

スタンドを理想にゐがくウエトレス
病氣よりうちが氣になる出養生
お別れの辻までしやべる女學生
椽側の柱はヒスの泣く所

乳母車行きこう人にほゝゑまれ

大連 佐々木三福

喘ぎ〳〵くぐりぬけたる畏の數
非常時をどこかに感じつゝ遊ぶ
統制に堪えて銃後は火と燃える
ソ聯機撃退
飛んで來いされど歸りは無いものぞ

今治 渡邊曉童

重患の恩師大樓先生を訪ふ

熱の手に吾が手をもとめ給ふなり
汽車やがて祭の村を貫ぬきぬ
夏の氣配の海に添ふ汽車
滿洲移民氏神樣を連れて行き

廣島 濱田久米雄

無雜作に抱けば吾が子は顏を寄せ
子の前へ座ると別な顏になり
トマト、茄子、自活の庭が狹いなり
三味線は軍國調で鳴り終り
算盤とペンで終らん人生か

慰問文或は淡い戀に似て
驛辨は昨日や今日の聲でなし
もうシビレ切れたに木魚まだ止まず
スマートと言ふ痩せ方もあるのです
痩身長軀田中比左良の畫くこころ

愛媛縣大洲町 今川椋影

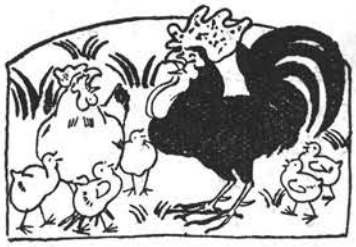
義理知らずでなしその日に追はれてゐ
寄宿舍のハヤシライスに葱多し
世間體結局は三越にする
ものごもの判がせりあふ立案紙

神戸 潮田明坊

許された日から暴君一頁
莫迦になり切つて評判よい男
灰になる刹那が性の停年期
世の中をセットあまりに多すぎる
ホーハナの一生だつたカナカ色

ハワイ 高澤一浪

（ホーハナとは耕地農業勞働者）



武玉川三編研究

（三一）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(586) **楊弓射も爪はつれもの**

秋の屋＝「爪はづれもの」は、褄はづれ者の誤りで、美貌の女といふ意かと思ふ。

東魚＝揚弓を射るにしても、手足の優美なのが良いと云ふ意味かと思ふ。

省二＝爪端で、揚弓を遊ぶにも身のしこなしの優しさが大切。（大言海を見しに褄外の語あり、それならむ。）

(587) **夜の葬をたゝく借り金**

秋の屋＝葬の宿を訪ふのであらうが、如何なる場合か不明である。

東魚＝雁が鳴き渡つたと云ふだけを前句關係で洒落て、「借り」の字をあてたのではなからうか。雁金と書く事はあるから、江戸座俳諧の洒落ではないかと思ふ。

省二＝急な金の必要があつて、夜分に葬の宿をさへ訪ねたのであらう。

秋の屋＝私は雁金でなく、猶且借金だと思ふ。

(588) **禁酒〳〵も氣の知れた人**

省二＝失敗しては禁酒々々といふ丈け、氣が知れてゐる。

秋の屋＝薄志弱行で氣心の知れてゐる人といふ意らしい。

東魚＝私も其お仲間である。苦笑を禁じらる。

(589) **むすんた形りてすたる水引**

省二＝どこの家庭でもやる。廢物利用は仲々せぬもの、二度目の使用はキズもあつて感じはよくない。結ばれてあるまゝ捨てられる。

秋の屋＝古水引は使用法がなく、何か益に立つかと取つて措いても、後に捨る外は無い。

東魚＝解く手數をかけず、結んだまゝ拔きとつて捨てられる。平凡なやうで見付け處の面白い句と思ふ。

(590) **やつこと言ふもむかし吉原**

秋の屋＝昔の吉原では、編笠を被り白馬に跨り、伊達奴を供に連れて、客が通つたのである。

東魚＝俳諧通言に、「徒婦（やつこ）不義の女を戒の爲に廓の勤をさすのを、やつこ又は役年といふ」とある。その「やつこ」であらうと思ふ。

省二＝「岡場所の不首尾な時に駕にのり」とか、「囚人の突出しを吉原で買ひ」、「美しい奴の顏の七つ切り」等に詠まれて居るヤツコかと思ひし。

(591) **高野聖にうそのない年**

秋の屋＝出家は妄語戒を犯さぬのである。

東魚＝「高野六十云々」の俚言があるが、この高野の僧も、まことや六十程の老年だわいと諧謔氣分に、「うそのない年」と措いたのではなからうか。

省二＝「高野聖に宿貸すな、娘とられて恥かくな」などの如く、惡僧もあつたといふから、此句の「嘘のない年」は活躍性がある。

(592) **面白くせんへいを喰ふゑほ！折**

省二＝烏帽子折の職業性と駄菓子のセンベイとの對照からの興味をねらつたもの。

秋の屋＝對照物の奇異なるだけで、面白味は渺い句だと思ふ。

東魚＝ゑぼし折の職工達が、茶うけ休みに咄が面白くはづむのであらう。ゑぼしと云ふ儀式張つたものを作つてゐるだけ、對照的に面白味があるのではあるまいか。

(593) **うつくしい後家を怖かる節句前**

省二＝後家樂と云ふ。節句前に一層美しくなる後家の噂。

秋の屋＝怖がるにも及ぶまいが如何なるもの歟。

東魚＝人の出入りも多い節句前、間違ひがなければよいがと心配する意か。

(594) **戸の締る音に崩るゝ辻すまふ**

秋の屋＝更闌けて月も落ちた。又明夜もある故、今夜はこれぎり。

東魚＝「崩るゝ」は、見物が去る氣分。

省二＝戸が締る迄も見物がゐた處、辻角力の興味らしい。

(595) **つゝみかね小間物賣をはつせ山**

秋の屋＝初瀬山に就いては、前にも種々の說が有つたけれど、此の句は已が思を包みかねて、小間物賣を仲立となし、艶書でも屆けさせるのである。

東魚＝小間物屋を戀の仲立ちにする意に違いない。

省二＝小間物賣は、さういふ用立ては、度々したもの。

(596) **八重むくら臼ぬすまれて廣く成**

省二＝八重葎茂げれる狹い寂しい住ひだ。臼を盜まれて却て夫れだけ場所が出來たとは、心情すがすがしい。

秋の屋＝盜む物が外に無いので、臼を盜まれたが、僥倖にその跡が廣くなつて宜い、といふ宿主の恬淡なる心を詠んだのである。

東魚＝寧ろ羨しい境涯だ。

(597) **取卷て聞く聟の白狀**

省二＝罪な話だ、が、聟殿内心愉快かもしれぬ。

秋の屋＝前夜は誰に誘はれて、何處へ泊つた。さあ〳〵さあ。

東魚＝聟たる者、誠にやり切れない話だ。

(598) **帆かけ舟半分はまだ夜か明す**

秋の屋＝東方の水平線上へ、朝日が纔に昇り、その光が帆の上半に映るけれども、下半は未だ暗くて、夜が全く明けきらぬとである。

東魚＝岸邊はまだほの暗い光景が想像される。

省二＝段々と爽快を加へて來るのである。

(599) **つゝまれて浮人形のうき沈み**

秋の屋＝上五の「つゝまれて」は、紙包にして賣られ行くの意らしいが、その後には幾多の浮沈もあること、人世と同一であらう。

東魚＝「つゝまれて」が澁晦であるが、矢張り前說の意であらう。この句にも例の重ね字が用ゐられてある。

省二＝嬉遊笑覽に、「六玉川四、浮人形の掌をこぐ、といふ句あり。今はひろうどのはりかねして猿を作り小船をこがせ線香花火をもたせ又は蠟引の紙にて鴛鴦を作り火をともして水に浮す」と。享保頃から有る。私共の子供の時は、人形の尻に樟腦が附けてあつて水上を走る。「つゝまれて」は周圍をとりまかれて、即ち浮人形の浮き沈みを子供達が取卷いて見物し居るのではなきか。

秋の屋＝浮人形が賣られて行くのを、傍觀しての感想であつて、子供達が取卷いて見物するのではなからう。

(600) **畫つる蚊屋に出來た岩倉**

省 二＝岩倉は石藏の意か。暗くて畫も蚊が出る故蚊帳が必要。（京都に岩倉なる所はあるが。）

秋の屋＝京都の岩倉であつて、草深い土地であるから、畫間に藪蚊も出るのである。

東 魚＝土地の岩倉だとすると「出來た」が可笑しい。石造の倉の意と思ふ。冷え〳〵するので夏の畫寢に石倉に入るが、蚊が多いから、蚊帳はつらねばならぬと云ふのを、畫蚊帳の爲に岩倉が出來たと曲をみせて詠んだものであらう。

秋の屋＝石造の倉庫を岩倉と稱した例は無いと思ふが如何。

東 魚＝廣辭林には、「岩倉、石造のくら」とある。

(601) **四十二の子の美しい袈裟**

省 二＝四十二の子は捨てねばならぬ迷信があつた。親子の無事を願つて捨てた子が、成長して美しい袈裟を纏ふ身分となつて居る。其姿をみる親の心は如何なものであらう。

秋の屋＝捨てた子とは限らず、僧侶となして世外人とした子である。

東 魚＝わざと捨てゝ人に拾つて貰つたりして、將來の災厄を逃れさせやうとする位の四十二の時の子だから、將來無事なやうに一層の事で僧にした子、それが美しい袈裟を着てゐるのが、いつそ哀れにいとしい。世捨人にした事が、今更にいとしいと云ふ心持ち。

(602) **高い手代の九重を出る**

秋の屋＝是れは臆說であるけれども、「高い手代」といふのは、高位の勅使のことで、それが九重の都を出て、關東の幕府へ下向する、といふのではない歟。

東 魚＝恐らく前說の意であらう。「高い手代」位の洒落は云ひさうである。土雛を土御門樣などと云つた例も、後に川柳に見えるから。

省 二＝私には「高い手代」が判らなかつた。手代なる言葉は色々に用ひられては居るが。

(603) **藪蚊追出す夕かほのやと**

秋の屋＝夕顏の宿といへば、和歌の題材ともなり、風雅に聞えるけれど、畫中も藪蚊に苦しむのである。

東 魚＝源氏物語に思ひよせての句。優にやさしい趣の「夕顏の宿」たるところが、これは殺風景な藪蚊を追出すといふアイロニーをねらひどころの句である。

省 二＝源語の夕顏の宿は五條あたりだ。此句思ひ合はせば面白い。

(604) **灯を蝋立に這入六月**

省 二＝暑い折でもあり人々は家内にゐない。その中に灯が薄すくなつてきたので、一寸搔立てにはいつて行く。

秋の屋＝場所が不明であるけれども、比叡高野の兩山に有りといふ、千載不滅の常夜燈ではない歟。夫れとも金山などの鑛夫である歟。

東 魚＝暑いので夜門口で涼んでゐたが、洩れさす家のうちの灯が闇くなつたので、うらさびしくなつて灯を搔立てに家へ這入る場合と思ふ。

(605) **よく似た顏をふところへ入**

省 二＝幼兒を母親が懷に入れて居る。

秋の屋＝異說無し。

東 魚＝「入」は「いれ」と餘韻をもたせて讀むのが良い。

(606) **一つ咄の屆く難波津**

秋の屋＝淀川通ひの三十石船で、乘客等の浮世話かと想はれる。

東 魚＝海から大阪へ着いた方と思ふ。海上の旅ゆへ、途中の出來事、見た事、皆人々が同じやうに見聞してゐる。「一つ咄」は同一の咄の意と思ふ。（逸話の意の一つ咄ではなからう。）

省 二＝東魚氏說甚だ面白し。然し「一つ咄」をさう嚴格に解しなくてもよいならば、淀川通ひで句意は通ずる。

(607) **弟出來て讓る朔日**

東 魚＝朔日に氏神へ參詣する事などは、小さい弟にまかせて、自分はもつと良い方へ羽をのさうと云ふ意であらうか。

省 二＝「讓る」は四角張つて居る。やらせるとの意なれば、兄は我儘になつたのか。

秋の屋＝是れは武家の總領が、幸か不幸か弟が出來た故に、夫れに家督を讓つて、毎月朔日の御禮を勤めさせると云ふので、氏神詣ではなくて、江戸城へ御禮に出仕するのであらう。

(608) **隅田のかすみを親子して漕く**

省 二＝隅田川春景色。「親子して」が句の焦點。

秋の屋＝春色の闌なる情景が、能く表現されてゐて佳句である。

東 魚＝堤の櫻が雲か霞かとばかり、見えるやうな句である。漕ぐは渡守りの親子であらう。

(609) **順見送る跡の大聲**

省 二＝順見は役人が順々に見廻る事。順見を送つた後で、大聲で色々な噂。

秋の屋＝あの目の大きな痘痕面の役人は、憎體でいけ好かぬなどと、農夫等が語り合ふのであらう。

東 魚＝「大聲」に役人に對する憤りも思はれる。

武玉川研究（六月號）正誤

頁	段	行	誤	正
(566)	二	一	菊女	賣
(596)	一	一	會の字の刷りが不明の露の字と	

あらゆる趣味のお稽古場
手はごきから奥義まで
氣輕く、樂しく、御上達
松坂倶樂部
會員募集
お稽古種目
長常清小鳴
磐唄元津物
尺八舞謠能
箏曲踊鼓小樂
ピアノ聲書日茶
道樂道畵本
華料理洋川
道理鼓句柳
氣棋松坂吹込
學道ド所
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
はみ込申御
七階松坂倶樂部へ
電話（表代）戎三〇〇三番
松坂屋
大阪日本橋

近作柳樽

麻生路郎選

今日は又新手な際を女見せ　下關　櫻川不水
おもむろに金のあるのがメニューより　同
七光りなぞ腕力の子は知らず　同
黄砂飛來勇士の汗を偲びたり　同
賢さはちよい〳〵お馬鹿さんになり　同
爪彈きへ見よ東海も可笑しけれ　同
さり乍ら馬鹿にもなれず小役人　同
南無三寶割增金は一つずり　同
蚊の樣に不倫の女白狀し　同
一家總動員丹精の芋を堀り　同

病床吟

夢の中の幼き頃に母の居る　嘉義　宮內耕朗
檢便はマイナス芋の蔓はのび　同
この先は軍規にふれる戰事談　同
長期戰この貧しさに打ちかたむ　同
水牛の背に驚居るうらゝかさ　同

丹路氏長女へ

一姫へ歸りを急ぐ父となり　同

悼酒井大樓氏

面影をおへば夏の夜の更ける　同
バンに出るあの手この手の汚れやう　大阪府高師濱　米本貴志子
追はれてる椅子のぬくみが捨られず　同
見限つた浮世のそこで字を習ひ　同
クリストも釋迦も盲目の世を終り　同
我町をきれいにするに罰が入り　同

石井將軍の出征を送る二句

軍港が張り切つて居る勝ち戰さ　同
生還を期せぬ港の灯を惜しみ　同
たまにする散歩喧嘩を見てしまい　尼崎　飯尾寄與史

英靈を迎へて

英靈はしばし市民の足を止め　同
半旗をたれて英靈に答ふ　同
舞臺裏男一疋食いはぐれ　同
父さんに連られて行く嫌な風呂　同
雷柱の到れながらもつなぎ合ひ　同
夫にもないしよ戸棚の痩せ藥　愛媛縣大洲　上甲可洲
醫者はさじ投げても親は救ける氣　同
奇蹟を當に看護續ける　同
リンゴ汁兒に心はわかるまい　同
病院では死に度こないにみんな泣き　同
同じ日に發つて淨土の姉の元　同
金魚の死その責任は誰と誰　張家口　小川靜觀堂
この蠅め貴樣と俺と同等か　同
シルクハット初參內へ捧げてる　同
洋家具へ昨日も佇つたワンピース　同
親を捨ててまで嫁きたいとは知らなんだ　同
曾根崎署ああ家出かと書いてゐる　同
香煙たゆとう新茶まゐらせん　松山　芝田靈子
大慈大悲觀音堂の雀の巢　同
ボブラボブラ今日から夏の風である　同
翡翠思へらくこの奥樣の行狀記　同
知默陶然五月蠅き事の只多き　同

父親は聖戰にあり鯉幟　今治　谷心府
つばくろの通り路だけ開けて留守　同
炭燒のお茶を貰つたハイキング　同
戰死者へ手柄を讓る歸還兵　同
食ひきれぬ絲へ牛はつながれる　同

潛入の正規兵捕へらる

結局は屠所へ續いた道なのだ　兵庫縣　酒井美知夫
一戰を濟んで勇士も針を持ち　同

前戰配給

海陸一致國に殉ずる姿なり　同

燈火管制

燈火管制こゝは敵地といふ暗さ　同
軍事便禮を欠いてた人から來　同
献金の小判せめても寫眞にし　兵庫縣　戸倉普天
金張りのカウスボタンに氣かひける　同
家政婦の金さへこればサット歸り　同
夏の風邪早慶戰を聞いてゐる　同
シンシ針四五軒露路の邪魔になり　大阪　米谷松太樓
盡忠報國男に產れ來たる幸　同
新世帶四五十圓の二階借　同
馬方も馬の心になつて押し　同
清貧の身へ停年も用捨なし　長野縣須坂　高峰柳兒
蚊を叩き損ねて餘憤なほ募り　同
女房の機嫌置酌見逃さず　同
中裁は算盤のいることへ觸れ　同
夢なぞを氣にしてなるかけの膳　大阪　畑田よし江
住みこみは廚のことをがめられ　同
パーマネント皆な苦のない顏に見え　同
ハイキング妻はコースを短かくし　同
打明けて呉れたは良いが荷を感じ　今治　長野文庫
來客に蚊帳をとられて夜長し　同
參考書龍頭蛇尾の汚れ方　同
賣れ殘り値札も直し位置も替へ　同
父還る日までに治れ子の病氣　奈良縣龍田　嶋田翠峯

農繁期風景

年寄りと女の多き農繁期　同
山彦の向ふの山もわらび狩り　同
迷ひ犬たゞうろたへてゐたりけり　同
船頭の晝寢に青い波うつる　大阪　淺野杢介

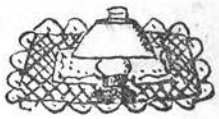
漫才は賢い馬鹿を聞く所　同
支配人だけは小型な煽風機　同　下關　多田市多樓
金時計父の片身であるけれど　同
金をとるまでは馬鹿にもなるつもり　同
案内を乞へばよち〳〵子が出て來　同
これしきの事へも妻は打算的　同　大阪　戸田孤蓬
支那の米喰ひつゝ支那の國を攻め　同
千日前目指して朝鮮服二人　同
帶上はへそくりなぞをかくすこと　同
灰皿も壁も新所帶　同
賣られるか大牛小牛喰はれるか　同　廣島縣竹原　西野みづほ
刈上げて見上る西の空紅い　同
蛙鳴け〳〵家も隣も田植笠　同
音だけで興奮をさすニュース館　同
猫の手が氣になる明日のハイキング　同
果物と花とキャンデーを見て暮し　同　大阪　津路紅多呂
空いてゐる席へ座らぬ令夫人　同
此のへんが川と地下鐵から見上げ　同
ラヂオ體操ナイトキャップをつけたまゝ　同
色街の朝に輝く白襷　同　京都　福田丁路
結納のごちらも際の無い叩頭　同
口曲げて男の意地を通したり　同
カンカン帽別れへ高く振るによし　同
軍神の心に似たり歸還馬　同　愛媛縣大洲　武田京司
オブラート友の辭世の句がうかび　同
麥飯の此の健康に感謝する　同
あきらめてから明朗の酒となり　同
花ひらり陣中風呂はおけさ節　同　北支　宇敷數吉
夕日赤々姑娘一人驢馬と居る　同
日本語バスの姑娘よく喋べり　同
妻揚子粗食になれて二年半　同
三國の眼にも日の丸強く見え　同　大阪　田中風葉
慰問文銃後は斯くも闘かへり　同
孝行をする約束の山を降り　同
海濱へ來て神經の伸びること　同
上品のごこか冷い言葉つき　同　愛媛縣大洲　米澤曉明
庶斷機が上ると走るのも若さ　同
旅裝キリ、亞細亞の空へ行く支度　同

もう歸る頃を屆いた旅だより　同
復線になつて大阪近うなり　大阪　澤田萬壽於
信號無視せねば乘れない交叉點　同
横着な奴をイエスの眼でながめ　同
夕立に追ひかけられた撒水車　同
チンドン屋窓の開く音背に感じ　同
ビール〳〵それから景色ほめる也　同　兵庫縣　北川春巣
喫茶店和服で行けば知らぬなり　同
あれが皆敵機ならばと腕を撫し　福岡　大西洋
歸還兵故國の光眩し過ぎ　同
ほまれにも馴れ親しんで二期近し　同
若葉風全部揃つた編隊機　名古屋　鈴木可香
カメラ買ふ話中學二年生　同
若葉風たまに出かけて風邪をひく　同
軍事便地圖をひろげて母を呼び　尼崎　山田南濃路
突擊のしばし大地は忘れられ　同
子や孫の書く慰問文みな泣せ　同
父さんの氣嫌が悪い夕御飯　大阪　富岡巨人
大學を出て物事に理窟めく　同
寢轉べば天井板に守り札　同
水一つ戴いて飯む峠道　大阪　古寺謙南坊
半分は貸します店のさびれ樣　同
團體は明日のコースへ念を押し　同
辨當にハンドバックに趣味の本　大阪　山川富士
乳母車放つたらかした春の草　同
風呂敷を結んでやつた子の使い　同　廣島縣竹原　杉原愛鳩
戀人か兄か知らねど百度石　同
新聞も見ぬせはしさへバーで會ひ　同　朝鮮　姜弘龍
食ふための笑顔も今は板につき　同
告訴する顔なり春を血に汚れ　同
ハイキング勇氣見せたい蛇が出る　同

農民デー一句

話すごと田植の出來ぬ官吏なり　同
お可笑しさを想ひ出してる針仕事　大阪　山本葉光
卷煙草とぼしく梅雨の椽で喫ふ　同
諦める事が最後となりて病む　同　朝鮮　弘津柳慶
金、金、金今の心が寂しいな　同
ニュース映畫友がサインの旗を振り

父無言戰死公報を讀み返し　同
ケースだけ高級にしてカメラ熱　長野縣上山田　佐二木千隈
泥坊と對の浴衣で溫泉の凉み　同
鶯を厠で聞くはおしいもの　同　今治　石手向上庵
ごやゞ〳〵と路地溢れ出た出征旗　同
物干でよりを戻して順に差し　同　平壤　小島鰐洞
入院へやゝ不安なる預金帳　同
日記帳希望が若い一と昔　同　大牟田　高田抱逸
戰勝の春を娘のモンペ服　同
金策へ見る氣のせない窓の花　同
輕石に一夜泊りの蟹も居る　同
刻まれて面相悪き石の犬　大阪　丸島利生
古針も拔かれ皇國に御奉公　同
拾石もあるとは知らず檢査官　下關　中村九呂平
小心と見られたくない法螺も吹き　同
產聲に手もあり耳も揃つてゐ　大阪　堀毛一龜
驛前のラッシュアワーに輕い世辭　同
自畫自贊會長計り悅に入り　堺　野島神樂
信仰も醫者もはなれた闇い部屋　同
祝餅孫へ殘して梅雨の黴　大阪　坂口芳一
金婚の式に三夫婦揃ふたり　同
似た人へ昔の戀を思ひ出し　廣島縣竹原　黑本芳泉
孫を膝に嫁も女中も瞳で使ひ　同
金力へ抗して歸る扉のひゞき　大阪　吉田湊万
横向いた妓の顏に自尊心　兵庫縣　三宅君女
春の雲バックミラーの中で浮き　大阪府　大島石艸
上かん屋パーマネントの娘で儲け　下關　國弘半休
スッ足袋の話共同炊事場で　堺　野島夢女
負將棋一手ちがひとくやしがり　尼崎　奥田綠水
食堂の少女はみんな似てる顏　名古屋　吉田文女
我が娘氣まゝに育て嫁いぢめ　大阪府　香椎薔薇
祝ひ膳お頭付きへ箸を割り　東京　森本秋子
おもしろい記事へ掃除の手を休め　下關　岩崎勇記
連れの娘のひとり螢を追ひはじめ　朝鮮　崔宗錫
へら台へ夫の嘘を信じ切り　尼崎　江口正路
蠅叩く爲に靜かに尻を上げ
これしきの石かと腕の力瘤
特價品箱だけ別に買ふて入れ



川柳 解題と例句

一路郎編

(6) 天麩羅

★てんぷらは魚介などの肉に、こねたうどん粉の衣をかけ、油で揚げたものを云ふのであるがそれからの聯想で、金屬へ金銀の色づけをする方法、即ちめつきしたものも云へば見かけばかり立派な人を侮蔑する語にも使用する。

★天麩羅の文字を近頃のてんぷら屋では天婦羅と書いてゐる。材料を隠し女のうすものとした方が美化されるからであらう。

★大阪日日新聞（昭和十四年六月二十二日夕刊）に、「吉本の春團治、金の動員に應じて先代春團治から譲られた金の羽織紐を、これは師匠のかたみやけど國家の爲めならと勇んで銀行へ持つて行くと、折角ですがこれは金ぢやありません天婦羅です…に遺の春團治も一寸テレて成程天婦羅だけに胸にもつてたんやナ…」といふ記事が載つてゐたが第二義のいゝ例である。

★天明の初年のこと。大阪で店員の二三人も使つてゐた或る商人の二男坊の利助といふ者が馴染の藝者を連れて江戸へ逃げ、山東京傳が住んでゐた京橋の同町の裏に住み、朝夕京傳の家に出入りしてゐた。

ある時利助が「大阪でつけあげと云ふ物を江戸では胡麻揚と云うて辻賣りしてゐるが、まだ魚肉の揚げ物を見ない。なかなか甘い物であるから、造つて夜店の辻賣りにしたいと思ひますが……」と訊いて見た。ところが「それはいゝ思ひつきだ。しかし試めして見やう」と云ふことになり、俄に調理させて試食したところが素的に美味いので早速賣るやうにすすめた。乗氣になつた利助は「これを夜店で賣るのに、行燈へ魚の胡麻揚と記したのでは如何にも氣がきかないし、語調もよくないので、何んとか名をつけていただけませんか」と云つた。京傳は「それもそうだなア」と暫く考へてゐたが、「天麩羅」と書いて見せた。利助にはその意味が判らない。「一體てんぷらとはどういふ譯なんですか」京傳はニヤ〳〵笑つて、「あんたは今、天竺浪人であるがぶらりと江戸へ來て賣り初める品であるから、てんぷらとしたのだ。てんは天竺のてん即ち揚ぐるの意である。ぷらに麩羅の二字を用ひたのは小麥の羅を掛けるといふ意味である」と戯れた。利助も洒落れた男だ。「天竺浪人のぶらつき故てんぷらとは成るほど面白い」と早速店出しのあんどんを持ち込んで來て、これに天麩羅と書いて呉れと頼んだ。しかし、京傳はあんどんの文字を自分で書かないで弟の京山に命じて書かしたさうである。これが天麩羅の起原である。山東京傳は江戸の有名な戯作者で寶暦十一年八月十五日江戸に生れ、五十六で文化十三年九月七日歿した。

★大阪の天麩羅屋では、御靈筋の梅月が明治十六年三月十六日の創業である。先代が東京で習らつて來て軒店で開業したのが今日の梅月の大をなしたのだ。こゝでは天ぷらと云はずに明治三十三年の秋から「金ぷら」と云つてゐる。蒲鉾屋の天ぷらや、安物の天ぷらと區別するために、金色の特製を作つて金ぷらと書くことにしたのだそうだが、これも天婦羅と同じく一種の美化と云へやう。

天丼の海老は蒲團を着た姿　利生

其の昔軒下に居た天ぷら屋　芳一

天ぷらだ胃散だ次は先生だ　たけを

貴婦人然とてんぷらの裝身具　方正

あの女冷えた天麩羅と云ふ感じ　同

どしや降りの音で天麩羅揚げられる　柳秀

てんぷらと云はれて外づす金鎖　同

一路集

募集句

郊外　鮎美選

郊外のバスで盥室覗いて來　茂治
郊外へ夫婦空家をさがしに來　夢女
郊外の祖母を見舞へば螢飛ぶ　近衛
郊外の舊家の軒に蕪の巣　神樂
郊外へバスは青葉の風はらみ　一龜
郊外へます〳〵地圖の判りかね　曉童
郊外のとなりは金持ち義太夫が好き　普天
五人目が產れ郊外に移つたり　半休
郊外へメッキリ殖へた作業服　鰐洞
郊外で總てを忘れ日が暮れる　照波
愛の巣は蛙の聲にうれしがり　春巣
行けそうもない郊外の名刺くれ　謙南坊
郊外はいゝなと朝の陽を拜み　不水
郊外の朝の別れも映畫めき　葉光

秀逸

郊外の家早くから蚊帳を吊り　ぎん
郊外のコスモスが咲く貸家札　風葉
郊外の靜けき夜を手紙書く　八九滿
郊外のいつものとこで聞くピヤノ　みづほ
愛人の住む郊外の紫雲　同
風さへも純情をもつ町はずれ　抱逸

三光

園藝の趣味まで出來たサラリーマン　吉宣
郊外を塗り繪のように埋めたてる　文庫
郊外の空氣走つて見たくなり　水客

軸

(春)郊外の窓から母の影うれし　鮎美
(夏)おたまぢやくしがいちにんまへになるをみる　同
(秋)妻の膝まるし虫啼く夜の靜か　同
(冬)子の呼吸の白ろく吐かれて雪山見ゆる　同

煽風機　夜王選

煽風機占めて居るのは御常連　文庫
赤ん坊へ思ひの過ぎた煽風機　鰐洞
煽風機集金帖をたたんだり　半休
言ひ淀むことへ煽風機かけられる　一亀
煽風機汗は次ぎ次ぎ出るばかり　風葉
煽風機これもコーヒ代の内　須彌浩
煽風機妓の方も少し醉ひ　水客
煽風機征途の汗を母懷ひ　普天
煽風機宵から吊つた蚊帳の中　葉光
煽風機危くよけて孫あるき　神樂
煽風機浴びて無心を言ひそびれ　みづほ
新入社煽風機には遠い椅子　同
仲人をまともに煽風機へ招じ　曉童
膳が出てから煽風機忘れられ　同
公平に末席も向く煽風機　春巣
煽風機下のテーブル込んでゐる　同
煽風機昨日の埃あふり立て　不水
煽風機程程女襟を立て　同
煽風機ビールが冷えた妻の聲　八九滿
煽風機要らぬ窓なり海が見え　同
煽風機赤字と別にうなる也　同
(佳)煽風機無駄には風を送らない　文庫
(佳)散りさうな紙幣へ止める煽風機　風葉
(佳)そうめんの端が揺れてる煽風機　水客
(佳)挨拶は後にまはして煽風機　謙南坊

ジーペの文雑と究研

「日の丸」制定當時の逸話

森半疊

六月號の「解題と例句」欄で「日の丸」制定がわが舊藩主名君島津齊彬公の創案であることを紹介されたが薩南生れの關係からでも快心事であつた。その頃の逸話を二三御紹介したい。

齊彬公は日本帝國の旗印制定を阿部老中に計る前に先づ名君水戸烈公に相談した。續て越前侯松平春嶽、佐賀侯、鍋島閑叟等々と盥廻しの會議が行はれたが容易に話が決らない。德川の三葉葵の說が最有力だつたが一荷も大日本帝國全体の旗印である天朝の在すことを無視してよいか」と公は大反對した。「では天朝の御紋章である菊又は桐は如何であらう」との說も出て來たが之も「菊桐は皇室の御紋章であるから下々までが之を旗印として用ふることは恐れ多い」といふ理由で工合悪かつたのである。

「日の丸」案に水戸烈公初めいづれも双手をあげて大賛成直に安政元年七月の孟夏の日盛りに登城した齊彬公が阿部老中に會見して「如何で御座る」とばかり「日の丸」案を示した。然る阿部老中は「お尤で御座る」と云つたきり稍曖昧な態度だつたので公が問ひつめて見ると流石の老中も頭をかき〳〵かう云つた。

「實は手前の紋は鷹の羽であるが、時には黒丸を用ひてる。若し貴案によつて日の丸を帝國の旗印と致す段になると阿部は老中筆頭を笠にきて自紋を吾國の旗印と定めた。僭越千萬身の程を辨へぬ奴ぢやとの非難を蒙らねば相成り申すまい。何か別に御名案は御座るまいか」

之を聞いて怒つたのが齊彬公である。

「左樣の事は云はゞ貴公一家の一私事ぢや、國旗制定の件は天下の公事である。貴公が困らうと困るまいとそんな事は此際口に出すべきであるまい」

と一喝して一も二もなく國旗は日の丸と決定し翌七月の十二日附で國旗制定の件が發令されたのである。

書け一奇に
全国便箋。

維新大業以來まだ日も淺い頃ある大國が吾が「日の丸」が余りに崇嚴で且威風堂々なので之を買收して自國の旗にしようと企てた事件さへ起つた。その買收價額は五百萬圓位だつたとの話だつたが貧乏な明治政府は五百萬圓の金はいかにも欲しかつたが流石に時の外務卿寺島宗則「薩英戰爭の折は英艦に乘付けてそのまゝ英國に渡つた快男子」は一笑に附してしてんでこの相談には相手にならなかつたよしである。今日のやうに一般國民が國旗を軒に揭揚するやうになつたのは明治五年九月十七日岡蒸汽といつて世人の眼を瞠らした鐵道が東京横濱間に開通した記念日に畏くも明治大帝が親しく横濱驛に行幸遊ばすので奉迎に横濱市が市中各戸に配布して揭揚したのが最初だつた。一寸氣付いたまゝどこぞの穴埋までに。

「日の丸」餘話

石崎柳石

六月號所載の「日の丸」解題は、有意義に拜讀した。常識としても、この程度に知つておくことは必要である。案外、人は手元のことすら知らなさ過ぎる。そして他人の財產の批評までもやる輩が多い。何ぞ汝の眼に在る梁を見ざるである。日本人は、日本を發見せよである。

而して「日の丸」の眞意を解して實踐せよである。

東京日日新聞社編に「日の丸由來記」の一本がある。即位御大典を壽ぐ意味で同紙々上に揭載されたものをまとめた單行本で、昭和三年十月發行されて居る。日の丸の旗をめぐる色々の美談佳話が集錄されてある。北清事變の時の白石葭江大尉の血染の日章旗の話や、乃木さんが村人に日章旗を配布して村人に國旗揭揚の心持を作られた話、日清戰爭の時朝鮮で天長節を壽いだ折、時の石黑軍醫總監の面前に差出された梅干染の日章旗の話等もあつて、それ〴〵讀者の胸を打つ。

日の丸の旗が、始めて民間に用ひられたのは、明治五年九月十二日、東京・横濱間に當時陸蒸汽といはれた鐵道が開通した日からであると記載してある。日の丸の旗が日本の國旗として布告制定されたのは明治三年一月廿七日であつた。太政官布告第五十七號によつてである。

本宮泰彦氏著、靜岡高校教授)の「おもしろい日本歷史の話」に據ると、日章旗の話がある。

「凡そ國旗は、國家の標號であるから、その國の歷史を語り、その國の國体を現し、その國の國民精神の理想を示すものでなくてはならぬ。」

舊幕時、日の丸の旗を國旗と制定したのには、水戸藩主德川齊昭公(世に水戸烈公と稱す)の努力に由るを書いてある。嘉永六年六月浦賀に來つた米艦四隻これがため夜もろくに寢られぬ上下の驚愕、こゝに幕府は水戸烈公の起用となる。嘉永六年の九月、遂に幕府は烈公の建議に依り、大船建造の禁を解くのである。かくて茲に總船印が必要ともなつて來た。かくて安政元年五月、國旗制定の論起り幕議に於て論ぜられた。當時の大目付・目付等は、中黑を以て之にあてんとし且つ古來源氏の旗印と稱し、固執して動かない。烈公は中黑の不可を論じ、日の丸の說を出張した。かくて同年七月十一日、烈公の努力によつて光榮ある日章旗と定められたと誌してある。

これは前說の薩摩藩主島津齊彬公の主張說とは異つて居る。さて、文久三年八月七日、一般御國標としてこれを用ふべしと公達があつたそうだ。

かの咸臨丸が大平洋の波頭を蹴つて、遠く米國にまで行つた折、帆柱高く揚げられたのは此の「日の丸」の旗であつた。聞くに、かの國人これが意匠に驚嘆し、千金を以て之を買はんと云つたさうだ。勿論これは一蹴である。

げに「光は東方」より、東の方、日出づる處、旭日の光は大八洲が根に洽く、又以て八紘を光被する。小學唱歌の白地に赤く日の丸染めては、こゝに深大なる意義が存する。熱烈活動・生成根元の太陽之が象形の眞紅の圓形、清純潔白のホワイトカラー、西歐人は白色は色の部類には入れぬとか、されど日本人は白を色と見なす。一切の色彩の生成の元とすら見做す。こゝにも抱含的な皎潔至誠の表徵がある。正義日本の標號とするに日章旗を措いて他に何があらうかの之を眞似たるが如き青天白日旗、白日は晝の太陽の稱である。日の丸の全体的な事に及ばざるものであり、故に蔣一派の白日の夢の儚さが現實となる。

揚げよ「日の丸」、天皇の御國のみ榮を壽ぎ祈りて、我等誓はむ、皇民の誠、高く揭げて各々の業に、ひたすらに努めむ「國旗揭揚の歌」の意を略省の散文にしたまでだ。

因みに、「日の丸」は、正規では大小に拘はらず縱は横の2/3の長さの長方形、日章はその長方形の對角線の交叉點を中心として縱の3/5の直徑を有する正圓と云ふことになつてゐる由申添へおかう。

名物とんかつ
揚ぢ、し
北弓ル
電
北六五
六九
七四
五八
番

川柳仁義（一）

岡田某人論

主として彼のカム・バックへの花束

高鷲亞鈍

去年の師走川柳大會で、偶然僕の向側に座を占めた男。午蒡のやうに淺黒く面長で、ギラ〳〵度ぎつい眼鏡などかけて乙に濟ましたところは貴公子のやうに氣品もある。此奴が岡田某人なんだ。僕が空手で情けない氣持になるのに、澤山、賞品を目の前に積んで嬉しさうな顏一つしない某人といふ奴、これや曲者だぞと脱んだ僕の目は狂つちやゐなかつた。それから丹路君の御宅で一度、奴も面と向つて話さなかつたから僕も、面と向つて話してやらなかつた迄だが先達ての「金昆羅船」の座談會で一緒になり、あとで戎橋のビヤホールでジョッキを十四・五杯あふるにまかせて喋べり、語り、論じ、夕色迫るところから、女給が腰掛を卓子にひつくり返へす頃まで、文字通り鯨飲した揚句が、手を握り、肩を組み、やいとかこらとか、貴様とか吐きあふ仲になつちまひ、元旦のやうに戸の締つた心齊橋通りを大聲叱呼してのしたのも、つひ前月の末頃だつた。

ざまアみろだ。僕の圖星は正に的中したんだ。要するに奴もやつぱり文學青年だつたんだ。近衞前首相も、有馬前農相も、現何とか拓相も昔、文學青年だつたと言ふぞと、僕は東京の新聞で讀んだゴシップを拾つて、彼に呶鳴つてやつたもんだ。うちの御大も大きな文學青年だい、だ。なアに文學青年が羞しいもんかい。某人よ、大いにやる可し。おめえをだからといつて大臣に推して日本をどうしらうつていふんぢやないけどね。せめて「川柳雜誌」で頑張つて呉れ、路郎御大も君のカム・バックには全的に期待を睹けてゐるんだ。いや斯ふいふことになれば俺だつてさうだよ。

ア・フォリズムか、エピグラムか知らんが、綺麗な、美しい字で書いてあるノートを與へられ、この僕に批評をしろとは某人も酷な男だ。第一人が悪いやこの善良で、純情な男をテコづらす法つてあるもんか。君は君なりに鐵壁な思考力、透徹した推理、鋭敏な類推は、まこと、日本のグウルモンである。玉子を採り上げていろいろと駄句つてゐる遍りは、一寸コクトオの稚氣がある。そして夢想してゐる長いセンテンスのところはブルウストの匂りがする、少し古糞いサイコロジイだけどね。ロの悪い點では人伍に落ちない僕だけれど、これ以上、どうにも批評が出來ないんだから仕方がねえ、業腹だけど、ええい一杯喰はされちやつたい。

櫻間青崖

岩本素人

櫻間青崖は畫がうまかつた。特に風景畫に最も秀でてゐた。呑み助だつた酒さへあれば御機嫌が宜かつた。だが權門や富豪に媚びることは大嫌ひだ、と言ふよりそんな機用な事の出來る男ではない。性格が許さない。なもんだから何時も泰然として貧乏であつた。好きな酒も容易に呑めない、それが何よりも苦痛だつた、だが當時青崖の名は相當知られてゐたので或時某侯から駕を持つて迎ひを寄越し若干の金を持つて來た事がある。青崖は金の顏を見たので我慢が出來ない、酒が呑みたい、喉の邊で早鐘を打つ樣だ。早速駕籠屋に何升かを買ひにやり、駕籠屋相手に呑み始めた。呑む程に醉ふ程に招待の事なんかスツカリ忘れて御機嫌百パーセント。一方某侯の邸では客は揃つたが青崖は待てども來ない。更に使を遣ると、青崖先生既に虎と化してクデンクデンである。「何、繪を書きに來い？　ウーイペロペロ酒席に興を添へる爲に繪を書けと申されるか？　青崖獲せたりとも幇間の眞似致さぬウーイ歸つて差樣にお傳へください」

渡邊華山と青崖は莫逆の友だつた。

一日華山がヒョッコリ青崖を訪れた。青崖は嬉しかつた。久し振りで大いに呑み且つ語りたかつた。青崖は一計を案じた「渡邊君」と青崖は言つた。「僕は一寸表まで出て來なければならないから二十分程留守を頼む。スグ歸つて來る」「よろしいゆつくり行つて來たまへ留守は引受けた」「濟まないが君のその羽織を一寸貸して貰いたい」「オーライ」と華山は心よく羽織を脱いで青崖の肩に掛けてやつた。青崖はヒョイと出て行つたが暫くするとニコニコして酒と肴を抱へて歸つて來た。

主客は互に藝術、人生、宗教を論じ且つ飲んで時のたつのを忘れてゐた。やがて夜も更けたので華山は歸る事になつたので「羽織を呉れ玉へ」と言ふと青崖はペコペコ頭を下げて「いや何とも申譯がない實は、折角の御光來故、何がなと思へど近來不漁で錢がない。で、萬策盡き、貴公の羽織を殺し、それで此酒肴を調へた次第平に赦されたい。つまり君の羽織は二人で飲んでしまつた事になる」「ワハッハハハ」人を馬鹿にするなと華山は言はなかつた。

華山は常に門人等に向つても、青崖の人と爲りとその繪に於ける手腕を推賞して止まなかつた。

國産の家庭常備藥
ペルメル
鬱問散
定價 20 30 40 1.00

青崖は其時褌がなかつたので、干した着物を取りに行かうにも外から見られてゐるらしいので立てなかつたのだ。

（本朝畸人傳より取材）

街に住めば

高橋かほる

松竹の本社で金昆羅船の映畫の試寫見學の初まるまで休憩所で待つ間に女の事務員や丸刈の彼氏やらが室から室へ出たりは入つたりいかにも劇務たる事も見學し私にはとても宮仕へは出來ぬと思つた。

いてんち新風景

渡邊曉童

國防色の服を着た十八九の青年の一人がリヤカーをひつぱつて一人が後を押しながら「あゝそれなのに〳〵」を唄ひ乍ら三味線箱を配つて廻るんですよ。入江たか子演ずる明治一代女にあつた箱屋殺しなんて……どうかして下さいよ。

此の一廓もいてんちと呼んでゐますがねー。此處の心臓部に有つた廣場がとう〳〵材木置場に成つちまつたんですよ。牛車がね、馬車がねー、排泄物はむろんですがねー轍の跡をつけてねー、ねーさん等が裾取つてシヤナリ〳〵とやるのにとてもいけませんよ。

檢番の前に有つた洋館二層の建物がねー、料理店に成り食堂に成りカフエーに成つたりしてゐたんですがねー。いづれも長くつゞかずねー。とう〳〵半島の人に借りられてねー。時節柄國策の線に添つた廢品回收の古物店に成つちまつたんですよ。

然し、こんなの、ノートに書き溜めたまゝにして置くテは斷じてないと思ふ。宜しく發表す可しだ。ぐうだらな川柳家達も啓蒙してやる意味で、高飛車にどつと公開するんだよ。カビの生へた川柳家たちはどんな顏をするだらうか、この雜誌に連載された塲合のことを思ふと、今から僕はとても樂しみなんだ。どいつもこいつも君の高邁な精神など判らなくつたつて、構やせんよ。路郎御大は既に目に止めてゐることだし、少くとも眞に君を理解する數人の共感者は出來るだらう。それで可いんだ全く、僕は君を惣れちやつたよだが某人といふ男は今迄、余りに寂しい男ぢやなかつたかしらん。ノートを讀んでみても、孤獨的で、個人主義的で、そして厭世的なところが多分にあつて僕もそこでちよい〳〵氣になつたんだけど、深く探つてみたらそれらは、某人といふ男の眞實に外れて、裏切つていつた人間のした罪だ、とみたんだ。即ち某人の孤獨とか、個人主義とかは、人間を愛さうとして愛し得られなかつた者のみの陷いる哀しい兇虫の姿だつたんだ。とか倉田百三の名文句も泛んでくるといふものである。

某人の個人主義は、さういふ意味に解してやつて欲しいんである。讀みやうによれば前月號の雜筆「一筆啓上」も不屈きな事を書き終せたもんだが、あれなどの物懶さだつて、いはば人間憎惡の一端とみて可い。つまり某人の個人主義は決して利己主義ぢやないんだ。世間には個人主義と利己主義をごつちやに考へたり、利己主義者を個人主義者と言つてしまつたりしてゐるが、それは絶對に違んだ。個人主義は他から裏切られ、愛情を封じ込められた者の一人ぼつちの遺瀨なさに痺れ呆けた純粋な人間であるけれど、利己主義は他を利用し、獲得し、愛情を惜しげなく奪ひとる、といつた手合の狡い世智たけたペテン師イカサマ、サギ、等の人種を指して言ふのである。いはば個人主義は、自分を痛めつけ、虐げ遂ひには己が生命を斷つことまで考へたがる者であるのに利己主義は他を痛め、虐げ、何處までも自分本位で自分の得のゆく事ばかり考へてゐる男達であると言換へても可いんだ。

そこで某人を痛めつけ、虐げた嘗ての罪を吾々は今や反省しても可いのではなからうか。こんなことを書けば、まさかと某人も、その大袈裟な僕の言ひつぶりに驚くだらうが、せめてもの、僕は、某人の言草を、それが少々ドグマであつても、許してやりたい氣持で一杯なんだ。いや、今後の「川柳雜誌」紙上に於ける某人の活躍を、たとへ文學青年の臭みがあつたとしても、大目にみてやつて欲しいと願ふこと切なのである。大体に於て、文學青年、それも眞の文學青年といふ者は、慨して、さういつた人間達なんだ。さういつた人間といふのは、今先に言つたやうな意味の個人主義者なんだが、此際、墮落、腐敗した川柳壇の地の塩となる意味で、さしづめ、岡田某人といふ僕と同じ位に若い、そして川柳壇には珍らしい文學青年を、吝な男だけど僕は全幅的に推賞し、持上げたいと思ふんである。

演藝・映畫に川柳を觀る

燈影座大阪公演

戸田孤篷

一燈園の息のかゝつたすわらじ劇團燈影座大阪公演。出しものは北京の姑娘から父と墓はれる崇貞學園の聖者清水安三氏の日傳より脚色せる「朝陽門外」。眞船豊氏原作の大人のお伽話「裸の町」！漠の樣に理想の夢に生きたがる男が高踏的な取引でさん〳〵高利貸にしぼられて、あがきがとれなくなつた時始めて世間並な平凡なものに案外眞理があるんじやないかと氣がつく。一つは天香さんの光明と祈を眞正面から、他は裏正面から解説してゐる。

朝陽門外 三幕

行商をしては教授がつとまらず　霄水夫人死す

鴨川の雲　天國の道近し

姑娘の母として死ぬうれしさよ

あきらめてゐても最初は筆談し

平和への今一本の人柱

愛の花咲けば素情も忘れはて

壁越える梯子のことも云つて逃げ

姑娘ら全しラッパに明ける朝

裸の町

善人の妻善人をもてあまし

善人と云ふ利己主義に氣がつかず

夢丈で喰へぬ女房肩を張り

不幸にも此の世は神の國でなし

人殺しする氣にもなる眞正直

宿なしの今夜はじめて知る自分

潔癖をすてゝ人生光りかけ

二五九九、六、二六

映畫「金毘羅船」

正本水客

海の水がもつたいないと云ふも智慧

こんたんの戀へまあーるいお月樣

朝飯のうまい見合の朝となり

心なきトンボ見合の席へくる

子曰く春は一家によみがへる

角座を觀る

（五月狂言）

高橋かほる

女の教室

グルッペを好い父が待つ輕井澤

鈴蘭をはらをいためぬ子が送り

源太しぐれ

あきらめてどすをだきねの渡り鳥

みかつきへお露は江戸を戀しがり

股旅のきれいな仲をうたがはれ

春秋座を觀て

—北野劇場—

操三番叟

水谷鮎美

千歳へ杵屋佐吉の絃がさえ

三番叟首をふり〳〵糸がきれ

姫田夕鐘

三番叟の苦しさが知れる無表情

痙攣は糸のもつれの三番叟

別れ囃子

水谷鮎美

序幕　堤の道（春）

河からの聲は實卷のまゝ上り

捨て科白行かうとすれど一目惚れ

人妻の影を踏んでる男泣き

姫田夕鐘

二幕目　橋の工事（秋）

河童の政惚れた弱身をそらすなり

すてばちの女岡惚れ自嘲する

戀すてゝ身はかるとゞ旅鴉

「青髯八人目の妻」を觀る

於夜惑會館

水谷鮎美

ホテルの灯眠れぬ欠伸ばかりする

夏の陽も戀も心もかはきぎり

ふたありはページを飛ばしいゝ氣也

爭ひのこゝろは愛の言葉なり

八人目の妻は理性を失はず

どうかして下さいよ。此れが今治のいてんちといふ處でしてね—。

病床寸感

酒井斗風

家内の母親が僕の入院中に、郷里で中風に罹り氣になつて居たが、歸國さす事も出來ず退院した今朝、やつと歸國さし、病人ながらもホットした氣持ちで獨りの自分を樂しんでゐる。

こんな時想ふのはやはり川柳の事だ。川柳を想ふ時、僕は子供にも川柳を讀まし、子供自身にうんと作句をしてもらいたいとおもふ。

僕は子供の綴方を讀むのが好きで讀むたびに驚きを新らたにする。子供にも大人の持つするどさが有り、太人のボヤケタ頭では考へる事が出來ない正しいものをいつも子供は持つてゐる。其の意味で、一流新聞紙、川柳雜誌なりで、路郎先生のような方をわざらはしどし〳〵子供に川柳を吹き込んでもらいたいとおもふ。川柳によらず柔劍道の稽古でも一流の師につけば何か會得してゐるものがある純粋な子供に分つてこそ川柳も高い位置におかれるのではないかとおもふ。（六、二十三、朝）

川雜・案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）、改號、移轉、句會案内柳書廣告、その他

懸賞川柳

課題「貯金」「素顏」九月十日

用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏

秀逸數句に薄謝を呈す

宛先　堺市出島町三五一番地　麻生路郎氏方　化粧新聞社柳壇へ

東海の代表誌　**川柳草薙**

一部一〇錢　一年一圓（郵税共）

名古屋市南區八熊町寺田

發行所　草薙川柳社

川柳きやり

菊判每號六十數頁

每月一日發行　一部廿五錢

東京豊島區高田本町二ノ一四六八　川柳きやり吟社

榎田竹林主宰

靜岡川柳

一部拾錢　一ヶ年一圓、税共）

靜岡市寺町四丁目

靜岡川柳會

川柳

伊豫

一部拾錢　一年一圓廿錢

松山市南柳井町五九

愛媛川柳社

貝釦

岡田某人

※

うつすらとしたものを透して來た朝のひかりが水面で黄金を帶びてもう一度上へ擴がつてゐる。あわび貝色の淀川。底の方でちらほら青いものが勢揃ひをしてゐるけはひ。

うす單めて鈍光る河や春近き

※

おんなじことを何度も何度もくり返して語り、それによつて僅に慰められねばならないといふのは、言語に絶した淋しさにちがひない。眠られない中年のお妾。置時計を合はせてばかりゐる。

※

女の數學。——掛算と加算とをごつちやにしてゐる。

※

空舞ひしてゐる男二人。一人は進んでゐるつもりで空舞ひしてゐる。もう一人は、進むのが恐ろしいので空舞ひしてゐる。浪費の點ではどちらも同じことである。

※

(美しく)晴れ澄んだ空。青。その奥の方で三角旗がひらめいてゐる。——金の龍の刺繍。

※

かつきり半分晴れて半分曇つてゐる空。晴れてゐる方が午前で、曇つた方は午後だ。

※

美しい本。——何んにも書いてない本。

※

夜、高架の上に汽車が横たへて行つた煙の中で青が赤になる。變化。煙がその色を薄めながら散つて行くと、そのあちらから、白い、ほかの灯が出る。時には月が現れる。何處からか輕い音樂が聞えて來て、一寸魔術めいた風景。

※

女の心理。飛躍する。但し必然性がない。まるで飛火するみたいなものである。

※

落魄れた幽靈。砂が眼へ入りました。

※

淋しくつて身動きも出來ない。動くともつと淋しくなり相だ。

※

話なかばに急に居合せた人達が飛びかゝつて組みついて來た。びつくりしてみんなを突きのけると腹が立つて來たので、外へ出ようと玄關まで來たが、下駄を履く段になつて脚がないのに氣がつき、これはと引返してみると、今までゐた部屋の中に一人の男が寢かされてゐて、坐つてゐる人達が泣いてゐた。よく見ると寢かされてゐるのは俺だつた。(以下次號)

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する(係)

催

▼川柳雜誌社は六月三日午後七時から誓得寺で例會開催。石井白面人君が支那語に就いて柳味ある話をされた。▼八日、廿二日夜有恒川柳會▼十八日午後一時松坂倶樂部川柳會。▼廿日、月評會を丹路居に開催。別稿「川柳一ト筋」參照。▼廿四日夕より尼ヶ崎句會。雨をついて箕面へ吟行。▼廿六日阪大川柳會、阪大川柳會で長崎柳秀博士がはじめて選句をされ笠原路生博士が長崎さんの句に就いてと題して講演された。▼七月二日は有恒川柳會と松坂倶樂部と合同川柳會を松坂屋百貨店中八階で開催。▼大洲水郷川柳社は五健虹の麿の兩君の歡迎句會を六月十四日椋影居に於て催された。▼川雜下關支部句會は六月十日半休居に於て開かれた。▼伊藤入仙君は六月十日津々良會を入仙居に於て開催。▼川雜廣島支部は六月二十三日野田弁玉君追悼句會を廣鐵局倶樂部で修營。

創刊

▼「川柳群」が七月五日、東京市下谷區上根岸八二川柳作句研究會から創刊された。▼「古川柳研究」七月十五日、東京市杉並區永福町三四五、古川柳研究會から刊行された。

消息

▼大森千代香君は陸軍病院の生活を滿一ヶ年續けられたが、目出度く退院され、二ヶ月の自宅療養後聯隊へ復歸される事となつた。▼大島濤明君は大連から飛行機で安東に行かれ玉田芩草君と快談。「仙人の氣で雲海の上にゐる」の句を寄せられた。▼大西洋君(福岡)は熱心な作句振りを示してゐられたが出征後暫く趣味に遠ざかり軍務に精勵されてゐたが最近原隊へ歸還されてから川柳も又精神的糧として缺く可からざる事を痛感され再び作句精進を續けてゐられる▼龜井晟修君(函館)から鈴蘭が屆く。十幾年間、この花が開くころには必ず屆くので同君の不斷の交誼を深謝してゐる。▼小林不浪人君(青森)は信州松本に往かれ民郎君と盃を傾けつゝなか〳〵話がつきぬとの便りに接した。▼植山九天君(出征)は華中鐵道へ勤務、上海へ轉住される事となり御家族を伴はれる目的で七月中旬頃歸鄉される由。▼橋本克海君(宮崎縣)は六月十四日從來の官職を辭され、近く宮崎縣で菓子店を開業される由▼淺野李介君(大阪)は七月八月の暑中を樺太へ出張されることに成り、七月九日夜、大阪驛を出發された。▼宮内耕朗君(嘉義)は永らく病氣で、一時は重態であつた相だが幸に全快され近く松山に歸省される由。▼野本呑水君は目下夫人なつ江さんの郷里で病氣靜養中。▼多田市多樓君(下關)は關門日日新聞柳壇並びに「話の關門」誌の柳壇を擔當され新進の養成に盡力されてゐる。▼石崎柳石君(今治)六月廿五日校用で新居濱市に出張、用果てゝ森東魚氏を大工場建設の逞くましい鐵骨の中に訪問快談された由。▼森東魚君(新居濱)「今柳石氏と飲んでゐる、兎に角相手は變つても飲んでゐる場合が多い、喜んでくれ給へ飲んでられると云ふ事はイクラカでも銃後の働きをなしてゐると云ふ事になるのだよ」と。

弔

▼谷本朱雀君(廣島縣)は兼ねてより病氣療養中であつたが、六月十七日逝去された謹んで悼む▼仙波夕人君(尼崎)は七月二日永眠された。謹しんで弔意を表する。▼早川右近君(横濱)は相次いで

(十三頁三段目へ續く)

パーマネントは
大阪・心齋橋筋周防町角
ナショナルへ
山口倫子 經營・電南992
B.7圓 A.10圓
・シヤンプー
・セット
・附屬共

趣味の古本屋
萬文堂
心斎橋筋南詰
東へ二丁北側

川・協

★蒙疆新聞で思ひ出を語る柳路君

蒙疆新聞の創立一周年記念號の「蒙疆草分け物語」に川柳雜誌社蒙疆支部幹事柳路岩崎武夫君の談で事變前のこと、熱河承德への引揚當時のこと、皇軍入城と共に再び張家口へ歸還した當時の感想が四段ヌキ見出しで感激的に語られてゐる。同時に同君撮影の思ひ出のアルバムが紙面を飾つてゐる。事變前の邦人はザット七十人だつたそうだが僅か一年半にして一萬五千人からの人口となつてゐる。これこそ興亞建設を如實に物語るものである。

★三越で川柳趣味展

戰線と銃後を主題として番傘川柳社では六月廿九日から九日間、大阪三越三階で第四回川柳趣味展を開催、川柳家の英靈の引伸寫眞が特に光つてゐた。川雜の籔川支部同人であつた澄田羅門君の英靈もその中の一柱。

▼愛媛川柳社では六月二十一日故酒井大樓追悼川柳會を修された。當夜は大樓居士の三十五日に相當する。まさに讀經のはじまらうとする時、「悼大樓」の記事ある「川柳雜誌」が配達され一同感激された由。

▼大阪時事新聞社前田學藝部長の斡旋で六月廿四日午後三時から、新興キネマ主催、松竹本社樓上で映畫「金毘羅船」の試寫川柳家招待會があり、同試寫後柳人を迎えて右映畫（漫才のワカナ一郎出演）に關する座談會が開かれ出席するもの蛙柳、舟人、豆秋、水府、溪花坊、砂人、亞鈍、雞牛子、某人、百樹（途中より出席）虹衣、路郎の諸君等で大阪としては近頃稀れな顔振れであつた。

▼岩崎松代さん（張家口）は六月廿四日來阪、七月四日午前九時廿二分下關行急行で歸張の途につかれた。同女滯阪中川柳雜誌社七月の會に出席、會場で柳友と快談された。滯阪中不朽洞へ二泊された。

▼渡邊曉童君（今治）七月八日朝、にしき丸で天保山棧橋に着麻生理事に出迎えられ不朽洞に落着き歡談。

▼このみ川柳會では小松園君の肝煎りで八日、午後六時難波集合體位向上と時鳥を聞く目的で岩湧寺に吟行。申仙、大研子親子、白柳子、友帆の兄弟滿潮、素石、圓坊、小松園の諸君等に折柄來阪中の曉童君を同伴して麻生理事參加。翌日午後下山。

ちゃんぽんから
湖月
奈良法華寺境内

（十二頁下段の續き）

澄子、冴子の二令孃を喪はれた。同情に堪えない。合掌。

▼八十島勇魚君（東京）は六月二十二日腦溢血で他界された。謹んでお悼み申上げる。

▼川雜創刊時代の同人、森田輝翠君の母堂が永眠された。謹悼

轉居

▼橋本克海君は宮崎縣兒湯郡妻町へ

▼吉中映二君は廣島市西蟹屋町四五三へ

▼國弘半休君は下關市長崎町東方司二〇六四へ

▼增元翠陽君は兵庫縣武庫郡瓦木村瓦林字御代開一三二へ

▼淺謙公君は大阪府中河內郡天美村字池內一八八へ

▼石手河鹿君は今治市東寶劇場へ

▼多田一波君は大阪市此花區上福島四丁目二十四番地へ

▼丸尾潮花君は大阪府北河內郡枚方町茄子作字坂淸水淸水ヶ丘小野キクノ方へ

正誤

▼前號中段十一行目しとし君の句、「手を伸ばせ」は「手を伸せば」の誤。

▼前號十二頁「大樓さん八景」の記事中、一段十行目デイはデワ二段五行目鬼に解は免に角、三段目三行目西は四、同十一行目十四年は十年、同廿二行目解は角の誤。

社告

▼加藤ライト君（川雜鶴町支部同人）は一身上の都合で不朽洞會員を辭された。

▼野本呑水君（港支部幹事）は病氣歸鄕のため、不朽洞會員並びに港支部幹事を辭された。

▼多田一波君は野本呑水君の後を襲つて港支部の幹事に推された。

一言御挨拶申しあげます

大變永い間可愛がつて戴きまして厚く御禮を申上ます。ことに中支那へ派遣されましてからは一方ならぬ御芳情を賜りうれしく存じます。愈々私も濁流、クリーク、柳楊樹を友としてだゝつ廣い平野を突走る華中鐵道の一員となりまして國策線上とかへ乘り出すことになりました。ぢつと眼をつぶればなつかしい思ひ出が次から次へと出て參ります、決して涙など出しませんが眼をつぶつてゐる一時が故國や皆樣へ御會ひ出來てゐる樂しい時です軍刀をはづしましたので腰のあたりがなんだか淋しい氣が致します。「敗殘兵は出ないか、抗日テロがとうのと御尋ねですか」丸腰でも氣はたしかです、そんなの心配してゐては大陸では仕事が出來ません、御安心下さい。近い內に家事整理に歸國いたします。其の節ゆつくり御會ひ出來るのを樂しみにしてゐます、土產話をどつさりもつて歸りますが御會ひ出來ない方もあると存じますから遙か大陸の廢墟の隅つこから御安全を祈りつゝ重ねて御禮を申上ます。どうか今まで通り御支援と御厚誼を賜るやう御願ひ致します。

昭和十四年七月

私書函上海三〇四四
華中鐵道株式會社總務部經理課
植山義隆

海越へてゆくつばくろを見てゐたり　九天

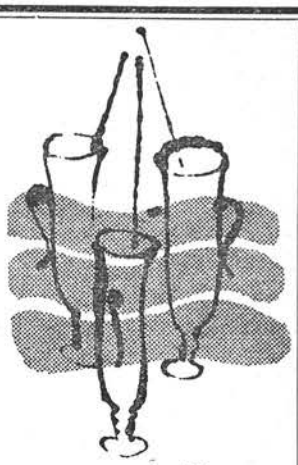
安產のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安產」へ導くことにあります。

樹林醫學博士　推奬
片瀨醫學博士　監査

フダカルシューム錠

大阪道修町　和田卯助商店



月評 川柳一ト筋

某人・白面人・豆秋・鮎美
孤篷・亞鈍・丹路・路郎

某人提出（川柳塔より）

朝のバスひつくり返りさうに行く　かほる

某人—結局この句は「ひつくり返りさうに行く」が、句のポイントだと思ひます。考へて見ると、別に奇拔でも何でもないが、「ひつくり返りさうに行く」と云ふ敍法が、出勤する人間の氣持、いらだゝしさなどを、表現して面白い。通勤生活者の朝のさう云つた氣持を、一邊バスの外側に立つて眺めてゐる樣な氣持が出てゐる。川柳塔で一番初めに眼についた句です。

鮎美—やはり、かほる君と呼べない、かほるさんと呼べるかほるさんのカラーが、よく出てる句だと思ひます。

孤篷—バスガールが落ちさうになつてゐる光景が目にうつりますね。

亞鈍—「ひつくり返りさうに行く」と云ふのは單に作者の眼にさううつただけで、通勤生活者のいらだゝしさ等と云ふ突込んだ觀察はしてないと思ひますがどうですか。

路郎—うちのリリ（五女）が、この句を讀むや否や、「かほるさん、まだ醉ふたはつたんやなあ—」と面白い批評をしてゐたが、通勤生活者でないかほる君にはこの批評の方が面白い。一寸した寫生句だ。

某人—作品を鑑賞する場合に作品の作句動機から離れて、作品そのものを對象として鑑賞者の自由な鑑賞は許されると思ふさう云ふ見地から私は前述の樣にこの句を解釋して面白いと思つたのです。

白面人提出（近作柳樽より）

寢轉んで行かねばならぬとこ計り　貴志子

白面人—たとへば、よそへ使ひに行くとか、日曜日の朝にその前日からちやんとした豫定を持つてゐる時に、どうかした拍子に、新聞かなにかの一頁に興味を覺えて夢中に讀んでゐる間に時間が經過してしまつて、行かうかやめようかと、ヂレンマに陷入つてゐる氣持がよく現れてゐる。大抵かうした結果は行かずじまひになつてしまふのですが。

亞鈍—米本さんの句では、「うじ虫が仲間を蹴つてせり上り」の句がよい。その理由は、僕の知つてゐる句の範圍内では、初めての着想だと思ふし、そのうじ虫の活動ぶりと人間との比喩を面白いと思ふから。

孤篷—「寢轉んで」の句は、その表現の仕方、所謂言葉の面白味が、いらだゝしさとのんきさをたくみにアレンヂしてゐるところに面白味があると思ひます。

路郎—「寢轉んで」の句は表現上に何等奇もないが、ものぐさな人の心境をよく描出してゐる「うじ虫が」の句は、うじ虫の寫生句の樣だが、實際に寫生したわけでなく、うじ虫を藉りて人間の醜汚を表現した句だと思ふ。それだけこの句の方には痛烈さが出てゐる。

—以上丹路筆記—

川柳塔—豆秋提出

運命はおほきな月のかげにある　民郎

豆秋—句の說明や意味を離れ象徴的な良い句だと思ふ。

鮎美—これは極く達觀した見方だと思ひます。言ひ換へれば—際限のない事ですが—殊に文字の使ひ方が非常にいゝと思ひます。例へば其おほきな・かげと假名を使つたのが良かつたと思ひます。

豆秋—いま鮎美氏の文字の使ひ方といふ事で思ひ出しましたが、先月號にゞだいにごう柳の枝をみて暮しゞといふ當の鮎美さんの句ですが、あのだいにごうと枝をみての見てを假名でしてあるので感服して居ります。

豆秋—今一つは第二號といふのに一路集の課題吟「紳士」で風葉さんのゞ第二號紳士の面を脫ぐところゞは當然、第二號は漢字で書くべきだと思ひます。

亞鈍—成程！　文字の使ひ方を斯う說明して貰へばよく判る。ところで某人さん何か？

某人—何かは感じるんですが正直に言ふと少し判り難いところがある。結局斯ういふ句は氣分の句であつて說明し難いが、もう少し普遍的なところがあつても可いんぢやないかと思ふ。文字の點は前兩者の說に贊成。おほきな月を大きな月と書くと空の月になつて了ふが、斯ういふ表現をすると豆秋氏の言はれたやうに、象徴的な匂ひが出てくる。然しながら僕の考へをもつてすれば象徴的な爲に綺麗な句にはなつてゐるけれど、そこに動かす事の出來ない弱點も含まれてゐる。

亞鈍—先生、これ位でどうですか？

路郎—では次へ移りませう。

川柳塔—丹路提出

鉢植の講釋をして大家去に　久米雄

丹路—僕の好みから言へば、先程の運命の句、うじ虫の句などの方が好きなんですが、この句に目が止つて、何だか氣が輕くなつたやうな氣持がしたんです。世俗的な大家と借家人との關係などを超越して斯う言つた平和な世界を描出したところに氣持の良さを感じます。

某人—川柳的な川柳といふ可き句、只こゝで一寸言ひ度い事はこの句から少し離れるか知れないが、今丹路氏が言はれたうじ虫の句のシニックに運命の句のシュール、そういふものにも心が惹かれ乍ら、しかも鉢植の句、斯ういつたものにある氣安さや安堵めいたものを感じるのは現代川柳家の大方が感じる一つのヂレンマぢやないかと思ふ。

丹路—只今某人氏が言はれた事は確にその通りです。

路郎—妙な言ひ方だけれど、それは丹路君が年をとつてきたんだと思ふ。若い時には食物でも偏食するやうに、どつちかが眞であらねばならぬ、決して二つのものを比較した時に二つのものが兩立するといふ考へ方は首肯し得ないものであるが眞の中には、どつちかゞ眞である場合と、兩方が眞である場合と、中間にも眞がある場とあるといふことを是認してくるものである。

亞鈍—つまり世慣れてくればさういふ風になるんですね。

路郎—例へて言へば歌舞伎の持つ美、社會劇、或ひは喜劇、皆それ〴〵特有の美を觀賞してその間に矛盾を感じないやうになつてくるやうなものである。これは文學する者にとつては良い意味での一つの力であると思ふ。もう一つ例を取上げると、文樂の味、レヴヰウの味、そういつたものは、共通的にその美を味へないのが普通だけれど人によればそれ〴〵の美を味はうことも出來るものだ。

亞鈍—ありがたう御座いました。白面人さん、一つ喋つて呉れませんか、

白面人—よく判らないことばかりで、實は僕なんか未だ右か左か、どつちが良いとも言へないし……。

丹路—先生！　僕など鑑賞する場合は、さうですが、作句する場合はどちらかに定める可きものぢやないでせうか。

路郎—それもその時折りの態

度で自由にある可きだと思ふ。一つの型に嵌めてしまうといふのは作家の態度ぢやないな。

豆秋—僕の好きな句は感覺的な句で、作れば万才みたいになる。（笑聲）

丹路—今度の豆秋さんの句は良い。〃天國へトボ〳〵行くか尾を垂れて〃などヒヤツとした犬の一七日も面白い。

路郎—一句々々がその心境をよく出してゐる。これは一聯の詩だな。一つ〳〵離せば、特にすぐれた句はないのだが。

白面人—今月號は犬の句が多いですね。

路郎—それぢや一つ僕が句を提出しやうか。

亞鈍—どうぞ。

川柳塔＝路郎提出

鼻毛をば抜き〳〵遊ぶプラン出來　由布

路郎—何んでもない事を句に詠んだといふ點では、さしてすぐれた句だと云へないかも知れぬが、それでゐてそこに滑稽味が出てゐる。滑稽といふものははじめから面白いこと、或ひは矛盾した事といふやうに組みたてられたやうな滑稽はつまらない。漫畫の境地と同樣に、もう我々の川柳の畠では無いと思ふけれど、この句のやうに作者自身が功まず自然の滑稽が感じられるのは川柳の一つの畠として推賞したいと思ふ。近來、斯ういつた句が非常に少くなつたやうに思ふ。

孤篷—滑稽も映畫にあるやうな遺瀬なさがあるやうな氣がしますな。プランが出來て實行できなかつた句。こゝに遊びとあるが、私等旅行好きで暇がなく原稿用紙を書き潰して結局行かなかつた。

白面人—たゞ漫然とした觀察だが、これはたゞ單にプランが出來て、早速遊びに行くんぢやないか。

路郎—この句に、遊びに行くとか行かんとかいふことは問題外だ。

丹路—たゞ空想だけ。

某人—この句を七七にしたら面白い句にならんかと思ひますね。

路郎—それぢやどういふ風に？

某人—〃鼻毛抜き〳〵行くとこが出來〃とした方がよい。鼻毛をばのをばが引つかゝるんです。以前僕、山雨樓氏などにも言はれた事でしてね。

路郎—この句の場合、「をば」は差し支へないな。つまりプランが出來たのであつて、遊びに行くとか行かんは問題ぢやないんだ。その十四字では行くことに力點が出來て原句の味とは違つたものになる。

亞鈍—豆秋さん一つ何かこの締くゝりを、

豆秋—このプランが現實を離れて空想にまで延びて大分に面白いらしい遊びらしいので作者の忍び笑ひまでが身近に泛ぶやうな氣が致します。

鮎美—作者の由布さんは私の支部の方でよく知つて居りますが、この句の通り、遊びに行くプランだけ大袈裟にたてゝ私共を笑はすやうな人なんです。一寸これは内輪話で速記はどうぞ御遠慮下さい。

丹路—これで亞鈍さん何句拾へましたか。

亞鈍—僕の方で三句です。

丹路—ぢや少しスピードをかけてもう一寸頂戴しませうか。これで誰が提出してないですか、鮎美さんと、孤篷さん。

鮎美—先生！　近作と、川柳塔以外の句はどうでせうか、酒井美知夫さんの〃汗と兵隊〃を提出したいんですが。

路郎—可いでせう。別に近作や川柳塔に限らなくても。酒井君の卷頭の句も、近作として送つて來たものだし。

亞鈍—ついでにぢや孤篷さんに川柳塔で句を拾つて戴けませんか、あれば、それから先にやりませう。

孤篷—ではお先きに。

川柳塔＝孤篷提出

おもちや箱あいたは母の乳房へ來　柳秀

孤篷—長崎さんの句で〃おもちや箱、あたいは……〃あつ、失禮しました。あいた、あいたですな、これやどうも、私はあたいと讀み違へてゐました。ぢや撤回します。あいたはどうも感心せん。

鮎美—私もさう讀み違へてゐました。これや先生誤植ぢやないんですか。

路郎—誤植ぢやない、あいたはです。

豆秋—これは矢張り本字にしなければまぎらはしいですね。

路郎—そう、そうだね。

亞鈍—ぢや鮎美さんにお願ひして、その間に孤篷さんに別に句を選つて貰ひませう。

卷頭句＝鮎美提出

汗と兵隊　美知夫

鮎美—先生が本號で書かれてゐる川柳勇士の「川柳勇士の留守部隊訪問記」で皆さんも御存知の通りです。「汗と兵隊」の内より、特に感じた句「子の寫眞汗に濡れてるまゝ笑ひ」「水筒の糧より多い汗となり」「一寸待てと軍醫も汗をふき給ふ」によつて異議なしに頭が下ります。酒井美知夫君の武運長久をお祈りして、ます〳〵川柳兵隊に精進されん事をお祈り申します。（一同肅然）

川柳塔＝孤篷提出

仲麻呂をつく〳〵思ふいゝ月夜　沒食子

孤篷—南京の空をみて出來上つた句だと思ふ時、そして仲麻呂が日本に歸れずに支那の土になつたやうに自分もたとへ聖戰が終るとも興亞のために、この土の上に一生を終らうといふ決心からの作句のやうな氣がして感激を覺えて居ります。それから仲麻呂の句から思ひ出しますのは、仲麻呂の出たついでにと申しては何で御座いますが、川柳の詠史の方面に、斯ういつた本統の味のある作句をどし〳〵拜見さして戴き度い と思ひます。（一同再び沈默）

亞鈍—えらいかしこまりましたな。

孤篷—鮎美さんもさうですがやはり皇軍の勞苦の事を思ひますとね。

亞鈍—御尤も。

卷頭句（戰時句）總評

某人—「汗と兵隊」の酒井美知夫君の句、それから、今の沒食子君の句、更らに——慾が深いが——近作柳樽にある宵明さんの「從軍誌ここからインクきれてゐる」斯ういふものを讀んでゐると原地に行つた人でなければ作れない樣な、さし迫つたものを感じて一言もないと思ふ。沒食子氏の「春泥にすべらじと行く擔架兵」それからこれに續いて先月號の靜觀堂氏の「松葉杖春泥やつと跨いだり」そのほかいろ〳〵あるがとても銃後の吾々の作り得ないものが、この向ふ側にまざ〳〵と感じられて原地を知らない人間が、うつかり原地に居るやうな句をつくつたりするやうなことは出來ないと思ふ。

豆秋—原地にゐる人の中でも情報部とか、部隊長とかいふ人の作られた句と違つて、とりわけ兵隊さんとしての句であるところに特別の迫力が感じられるやうに思はれます。

孤篷—先生も後記で「汗と兵隊」を火野葦平そこのけと書いてありますが、全くその通りですね。

亞鈍—ぢやこれ位で雜談といふことに。

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規清

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

路郎・豆秋整理

雑川 本社六月例會（大阪）

六月三日　於 誓得寺

席題「お姫様」　互選

お姫様家ではやんちやな娘なり　海山
かけひきは下手お姫様笑ふだけ　万的
お姫さまの笑顔見られるい〻天氣　頑童
姫君へ其他多勢手をつかへ　夕鐘
首ふるだけですむお姫様　里十九
カツレツを切るのに困るお姫さま　豆秋
お姫さま新聞記者を煙に巻く　八九満
口説かれた事を氣にせぬお姫さま　同
お姫さま素顔にまるみある日向　鮎美
白蓮や紅蓮お姫さまうれし　同
支那そばが食べたくなつたお姫さま　同
星さんを乳母と數へるお姫さま　紫香
お御輿へチンもつれてるお姫さま　同
お姫さま襖も人がしめてくれ　同
お姫さま内輪で歩く癖があり　巨人
銀幕へ入るお姫さま勝氣なり　同
お姫様女中も負けず美しい　水客
お姫さま夜のピアノへ細く立ち　潮花

席題「地下室」　紫香選

地下室が物置になる不仕合せ　巨人
地下室で鼠の音におどかされ　同
地下室の壁を刑事は押して見る　春巣
地下室で友の噂をきかされる　万的
地下室の床屋で雨を訊ねられ　白面人
地下室でしばらく遊ぶ女店員　潮花
地下室で待たされてゐる子澤山　風葉
金で濟む事地下室へ揃ろて降り　水客
地下室へさぼりに來て風をひき　緑雨
地下室へどや〳〵と行く防護團　同
地下室でがん張る譯を聞き直し　鮎美
妻となり地下室へ用が出來　潮花
（秀）地下室へ給仕の机押しに來る　頑童
（軸）地下室へ順々に來るあみだくじ　紫香

席題「凱歌」　默平選

凱歌高らかに紙旗千切れとび　春巣
夕闇の中に凱歌は渦を卷く　八九満
ふるさとの山へ凱歌はこだまする　豆秋
凱歌聞き泣く病院の白衣なり　風葉
戰友の遺骨凱歌の手にふるえ　紫香
引揚げる凱歌揃はぬまゝでよし　白面人
一城をぬけば凱歌に眼がうるみ　風葉
ゲームセットマイクへ凱歌少し入れ　春巣
百燭にかへて凱歌の部屋になり　八九満
夕燒へむいて凱歌の手が揃ひ　紫香
玉砂利を踏んで凱歌を遠く聞き　鮎美
錄音になつて凱歌は海を越へ　豆秋
凱旋の歌楊柳の芽を見付け　水客
（秀）凱歌〳〵猛虎の軸をかけた父　鮎美

席題「峠」　緑雨選

ハイキング軍歌で峠越してゆき　白面人
買出しの歸り峠で子と出合ひ　万的
信心の力で峠を越えてゆき　八九満
思ひ出の峠に立てば春霞　巨人
峠から乗合バスがあると聞き　紅多呂
土器を投げて峠の高さ知り　默平
峠からパラソルを又さし直し　頑童
峠には昔のまゝの茶屋があり　万的
兄妹の別れとなつた峠なり　鮎美
辨當は峠で開く事にしよう　李介
之れからは下り峠で栓を拔き　默平
峠まで木炭バスをはがゆがり　春巣
（秀）峠からこうもり傘が邪魔になり　かほる
（軸）峠から呼びかけてゐる良いところ　緑雨

席題「鯨」　李介選

捕鯨船次男ばかりで船出する　春巣
鯨ふと魚は何んてちいさかろ　里十九
内海と知らず鯨は迷ひこみ　緑雨
動物園鯨骨すゝけたまゝおかれ　孤篷
日の丸の下で鯨の腑分けする　同
だんだんに鯨へ砂がかゝるなり　かほる
釣合のとれぬ眼をしてゐる鯨　白面人
四、五間の先で鯨が向きを替へ　風葉
南極で鯨平和の夢破れ　海山
物好きな鯨大阪灣へ來る　豆秋
（秀）一匹の鯨に漁村よみがへる　富士
（軸）グロテスクな割にやさしい眼が下り　李介

相撲吟「寝言」　互選

翌日はバレた寝言でおごらされ　默平
寝言を笑われてゐる朝の膳　富士
蚊遣香母の寝言も氣が弱り　水客
學校の事をねごとに云ふてゐる　かほる
父親の寝言へ末つ子坐り込み　万的
段梯子で寝言を聞いた二階借　紫香
寝言から昨夜の事を尋ねられ　李介
燈の消えた部屋から寝言聞えて來　春巣
お妾の寝言へ猫が鳴きにくる　鮎美
子の寝言母内職の手を休め　里十九
（優）子の寝言妻と瞳が出合ふたり　夕鐘

兼題「薄情」　豆秋選

薄情にされて猫の子も憎し　八九満
薄情な女の足袋が美しい　水客
司法室薄情の男叱られる　富士
薄情な人よと産婆さんに云ひ　紅多呂
薄情の寝言を聞いてしまふなり　かほる
薄情をおこつて話す顔でなし　李介
これきりと云ふ手紙にあきれて居　緑雨
電文を讀む薄情の眼のうごき　鮎美
薄情にもつてこいの雨がふり　里十九
薄情な人へ羽織を着せかける　八九満
金のあるうちはお客にして呉れた　白面人
薄情な男へ藝妓醉ふて來る　紫香
薄情な事をは加へ書いてくる　かほる
足のうら見せて薄情寝ころがり　鮎美
薄情な男の影を踏む月夜　潮花
薄情な薄情な眼ねむつてゐ　紅多呂
薄情に馴れて一時を聞いて寝る　默平
薄情を柳の下で叫ばせる　李介
（秀）バスケット世の薄情を知る日なり　八九満
（軸）酸いものが欲しいと聞いて寄りつかず　豆秋

兼題「うるさ型」　路郎選

ノーハット和服で似合ふうるさ型　紫香
うるさ型今宵のどれも金が無し　潮花
うるさ型値切る役まで買つて出る　葭乃
押賣も尾を卷いてゆくうるさ型　五郎
子の事で校長に合ふうるさ型　春巣
一株の發言權を振り廻し　豆秋
うるさ型草履を雨にぬらして來　水客
うるさ型あごで使へる人もあり　風葉
表札をぐつと見あげたうるさ型　潮花
うるさ型電話の横に待つてゐる　水客
せしめたか笑うて歸るうるさ型　默平
敬遠をもう見破つたうるさ型　夕鐘
うるさ型こんな雨でも出席し　葭乃
笑つても愛嬌のないうるさ型　紅多呂
うるさ型頭あがらぬ人に遇ひ　默平
うるさ型家では弱い男なり　風葉
文句より手が先にゆくうるさ型　巨人
うるさ型の妹と知らず戀をして　八九満
入墨をちよろつかしながら借りに來る　夕鐘
きつちりと時間を守るうるさ型　緑雨
仲裁へ眼からからんだうるさ型　白面人
力にもすることもありうるさ型　風葉
うるさ型あのステッキを眼に殘し　潮花
嫁の里では人氣あるうるさ型　春巣

うるさ型板塲が頭下げに出る　豆秋
(人)うるさ型案外情にもろいやつ　五郎
(地)うるさ型將棋の腕もあなどれず　水客
(天)うるさ型鱗の椅子が空いてゐる　富士

雜川　**梅田支部句會**（大阪）

天野卜居君送別句會
五日三十一日　於武田尾　元湯旅館
田邊由布報

出發、貸浴衣

出發の鼻がひかつた一人旅　鮎美
出發へ信ずる友が居て呉れる　靜波
出發へ誓ふ二人の人生味　秀峯
出發へかち氣な女一人ゐる　由布
神を信じて出發してるなり　鮎美
出發の若葉嵐のくるもよし　卜居
貸浴衣女房は長い裾を引き　靜波
貸浴衣膝のまるみへ瀧の音　卜居
庭下駄の音も涼しい貸浴衣　秀峯
貸浴衣いちばんあとはやぶれてゐ　鮎美
貸浴衣君もよつぽどいけるくち　同

かほる集　ろくぎんど報

初發

客一人乘つて初發の雨の朝　靜波
神詣り初發電車でうまがあひ　鮎美
急な旅初發へ雨が降りつのり　同
湯の街の二人初發ときめて飲み　由布
見送りの初發へ犬もついてくる　斗風
初發出し驛夫はひまな水をまき　同
ふるさとへそむき初發の灯がまぶし　秀峯
公休日初發を夢の中で聞き　靜波
丸番が初發に一人よく目立ち　由布
團體の客で初發をまごつかせ　靜波
親切な人に初發を見送られ　かほる

故酒井大樓居士追悼（松山）

六月廿一日　於千鳥湯

旅、夢、小男

梵鐘を聞く日聞かぬ日旅續く　耕一路
旅と云ふ氣持標準語で値切り　漫歩
旅愁もう一本つけて河鹿きく　柳墨
旅の夜のデカタニズムを如何にする　虹の麿
酒の香に輕い悔あり旅の空　南葉
いゝ所教へて貰ふ旅の宵　雨城
遍路笠旅の疲れを見せてぬぎ　ソケン
旅に出て里の訛に耳を立て　清軒
四五日の旅に土産の多すぎる　天陽
旅の空巡査の言葉だけ信じ　同
旅の氣易さ仁丹も呉れ　克海
旅の夜の枕の白さ寢つかれず　虹の麿
スパイ平然として旅券見せ　楳子
旅から歸つた疊の落ちつき　曉明
逝く水へ旅人らしい淋しい目　五健
何樣か知らぬが旅で拜む宮　同
夢ありて人の心の樂しきか　大坊
幼な兒の寢顏乳呑む夢だらふ　松葉
ほろ甘き夢を蚊帳から逃すまじ　虹の麿
ニキビ華やかにして夢を追ひ　ソケン
子の夢を聞けば奇麗な寶島　五健
一つゞつ夢が崩れて行く浮世　雨城
小男が大きな奴を下に見る　鬚武者
團體の中の小男よくしやべり　素泉
五尺には足らぬ男の日本刀　五健
小男を宿の浴衣に感じます　泰泉
外人へ見よ小男の贈つ玉　五健
立志傳小男と云ふ動機あり　克海
脇息に寄る小男の侮れず　五健

雜川　**北、港、記念合同句會**（大阪）

六月四日　於丸尾潮花居
丸尾潮花報

忍び逢ひ、金魚、鏡、成功、
教會、軍艦旗、青葉、地球、
興亞、花鋏、藤椅子

忍び逢ひ、ヘッドライトがまともに來　某人
藤椅子の眠りへ蟬の聲しきり　稔幸
引越の藤椅子高う〳〵積み　紅多呂
藤椅子の足がみじかひ一人旅　水客
風雲急なり地球廻つてる　一笑
地球儀のこゝは鯨を取るところ　白面人
眼にしみる青葉へ戀のある若さ　松太樓
煽風機青葉の風がうらやまし　アート
東亞建設日本製の汽車が行く　万的
興亞々々日本刀は曇りなし　白面人
支那語などかじり興亞の隅にゐる　孤篷
聖書一册教會に居る血は若し　呑水
君ケ代に仰いで泣いた軍艦旗　水坊
軍艦旗砲火のうすれ行くところ　水客
どうしても勝たねばならぬ軍艦旗　謙南坊
すれ〳〵にかもめが飛んだ軍艦旗　紫香
軍艦旗赤鉛筆を子に借られ　某人
もうこんなとこまで進む軍艦旗　風葉
花嫁の自分をそつと見る鏡　進
鏡台へ妻妻らしく塗つてゐる　綠水
ほゝ笑みを鏡へなげて女立ち　潮花
妻として生る望をもつ鏡　春坊
幸福な息にも鏡くもるなり　某人
退屈な夫婦金魚に見下ろされ　紫香
金魚もう動かず冬の覺悟する　松太樓
花鋏店は息子に任し切り　孤篷
花鋏もつ母上に殘る艶　潮花
花鋏矢車草の露に濡れ　万的

雜川　**今治支部句會**（今治）

六月二十二日　長野文庫報

理想、夜學、人物、大願、思案

あばれつ兒劍劇王になるつもり　歌調
女學生理想は婦人雜誌型　文庫
小あきんど高の知れたる理想もち　同
理想など捨てゝ朝顏でも咲かそ　曉童
夜學丈け出た成功がほめられる　歌調
緣談は人物よりも先づ俸給　傳
人物は出來たが酒の量がふえ　曉童
大願の叶ふたらしい赤鳥居　向上庵
長期戰大願の旗氏神へ　清柳
理想へはまだ〳〵遠く借家に居　向上庵
丁稚では終り度くない夜學生　文庫
夜學から戻つて飯をからにする　曉童
夜學からならして戻るハーモニカ　向上庵
大願成就御禮詣りに花咲いて　曉童
おみくじの大願成就に氣乘して　傳
思案などした事もない若且那　歌調
賴母子を落しそこねた腕を組み　向上庵

雜川　**竹原支部句會**（廣島）

四月二十二日　於梶川芳郎居
黑本芳泉報

粧、兩手、聲、リックサック、
新兵、句集、友、空

娘の化粧母は立つたり座つたり　可笑
制服を脫いで化粧の小むつかし　芳郎
藪入の兩手を母は見逃さず　同
兩の手を擧げて東へ叫ぶ幸　みづほ
すゝり泣くドラマの聲にせまるもの　芳泉
家主との聲が次第に高くなり　愛鳩
愛人の地聲を聞いて蛇がゐる　みづほ
まだ早い櫻へ江戸ッ子氣が揃ひ　同
母の愛にリュックサックは重くなり　芳泉
石室に明日を樂しむリュックサック　芳郎
青葉吹く中をハイクの女連れ　芳泉
身に合はぬ軍服にさへある誇　同
麥飯のことも新兵書いてゐる　愛鳩
それ〳〵の個性に句集出來上り　芳泉
口笛を友と一しよに春の宵　紫蓮
母の目に惡友らしく映るらし　みづほ
出征へ空も晴れてる發車ベル　紫蓮

水郷川柳句會（伊豫）

今川椋影報

妙藥、風呂、大樹、筏

妙藥を聞けば石垣のくさい草　南葉
妙藥の草これだろかこれだろか　莫哀
妙藥になじむ女のやせてをり　順平
妙藥は手近にあるを教へられ　曉風
妙藥の數に迷つた水枕　曉明
妙藥の甘さは利目疑はれ　不競
妙藥へ迷ふ心を淋しまれ　肱水
妙藥は心と知つて退院し　虹の麿
妙藥はやはり日本の草木にて　五健
よく釣れた釣れぬ話の仕舞風呂　同
湯上りのビールへ風鈴ゆれてくれ　椋影
風呂やもうずゐぶん更けた音を立て　肱水
雨ホロロ蟇へ物言ふ貰ひ風呂　五健
市外から掛つた電話お風呂です　曉風
湯上りに着かへて眺む山容ち　同
梢まだ霧にかくれて大樹居る　京司

5147209

雨やどる大樹のかげは太い雨　莫哀
雷鳴へ名物の樹をあぶながら　肱水
大樹慈悲安住してる鳥木蟲　虻の麿
大木の古事來歴へ逆らはず　曉風
枝を張る樹齡尊く見上げられ　五健
雨風に育ち大樹天を摩し　椋影
繪にかいた川へ筏の一つほし　柳水庵
建設へ建設へ筏流れる　虻の麿
筏が過ぎた川のうつろ　曉明
筏今流れのまゝをめしにする　椋影
筏師はコヽラの景に振り向かず　五健
筏舟浮世離れた唄がゆく　椋影
さからはぬ心筏の流れ樣　京司

川雜　**下關支部句會**（下關）　多田市多樓報

楠公父子、郊外、隱し藝、口紅
指、伊達卷、月明り、腹、五月

楠公の話得意な豫備大尉　九呂平
正成は雲の流れに不利を知り　市多樓
若獅子を櫻井谷に落し行き　哲志
郊外へひつそりかんと夜は明け　双龍
郊外の草伸び〳〵と春の朝　陽峯
郊外を身輕な日傘二ッ行き　代志久
郊外に住んで女房の愚痴を聞き　市多樓
郊外に深呼吸だけして歸り　九呂平
郊外の靜かな家にブルドック　米三
負け將棋相手の子供に惱まされ　川平
飲み相手來て晩酌が一ッふえ　莞治
首引の相手倒して負けてゐる　愚蓮坊
世間から相手にされず金を貯め　市多樓
大石が誓ひ果して腹を切り　花落
白襷無言の中に誓ひ合ひ　九二夫
誓つてる心と心海を越え　千頭坊
巢立ち行く小さい手と手誓ひ合ひ　勇記
眞劍な誓ひ勇士の目はうるむ　流星
青春の誓ひに麥の穗が搖く　九呂平
隱し藝へんなところへ力瘤　市多樓
居候とは思はれぬ隱し藝　半休
親父にもあつたのかいな隱し藝　勇記
口紅が濃いのか黑く寫つてる　苦笑
主婦と云ふ口紅も居り夜業の灯　一柳
口紅で子供が漫畫を畫いており　勇記
口紅の娘は小說に出そうなり　市多樓
道問へば人差指が動くなり　文福
指の先染めて嬉しい女の娘　比呂志
盲目の子指が淋しく動いてゐ　勇記
指先は何處を求むるヒットラー　流星
萬歲に紅葉の樣な手を擴げ　比呂志
指繰りをしては其の日を儲けてる　市多樓
此處にまで五感のとゞく指の痕　半休
伊達卷の儘七輪へ火を熾し　陽峯
子のオムツ伊達卷の儘月ながめ　殘月
里歸り先づ伊達卷になつて座し　市多樓
伊達卷が鏡の前ですねて居り　仙波
月冴えて歩哨は神の樣に見え　流星
月明り古けた我が家影をなげ　ヒデル
日本を守る歩哨へ月明り　半休
月明り同じ所で虫の聲　哲志
面一つ取つた氣合は腹から出　代志久
腹一ぱい言ふても見たい愚痴を持ち　きくの
腹卷をじつとおさへた田舍者　仙波
腹立てた妻白粉の香が高い　市多樓
鯉幟五月の空氣はらんで居　文福
五月風大きく吸つて鯉躍り　双龍

川雜　**鶴町支部句會**（大阪）　於双虎居　岩橋双虎報

六月廿日

筆無精、二階借、二ヲ昔、報國

もうぢきに親になる身の二階借　双虎
二階借女ばかりで花が咲き　房子
二階借ひやかされてる繪封筒　ライト
報國を誓ひネオンの灯をさける　松太樓
顔のきづ大きくなつて二ヲ昔　登美夫
二ヲ昔前の指輪を賣る時局　房子
二ヲ昔巡航船の話が出　ライト
二ヲ昔男の意地を捨てゝゐる　松太樓
年賀狀だけしか出さぬ筆無精　登美夫
筆無精またも濟まない便りくる　双虎
大阪になれてだん〳〵筆無精　小柳子
筆無精親爺ひよつこりたづねて來　同

よつばし川柳句會（大阪）　橘本綠雨報

母親、衝突

母親が娘の柄に草臥れる　利八
炬燵から母暖かい聲をかけ　喜多龜
關取に母者と云はれ小さすぎ　有迷信
子の爲めに母親祈る日が續き　春峯
母親の方が氣を揉む發表日　松聲
母親が笑顔で詰めるお辨當　糸柳
勇ましい便に母は涙ぐみ　竹葉
こま〳〵と母は意見をして呉れる　綠雨
母親は叱つたことをもう忘れ　一重
蔭膳に母親いつも一人言　翠曉
母親になり口紅はもうつけず　一林
吾れ四十あの子〳〵と母は呼び　雅人
母親の笑顔が歪むシャボン玉　ソウーチョウ壽堂
ハイキング母が一番後になり　腦留守
母親は又もあの手でだまされる　保郎
母親の意見終は涙なり　白峯
母親の手にも汗してラヂオ聞く　夢想
母親の多忙が知れる水の音　泊柳
母親の愛遠足の荷が重し　茶目坊
母親が連れられてのる急行車　鶴峰
母親の手紙に不足稅が要り　吉現
迷子を叱つて母は禮を云ひ　聲香
母親が子に體操を教へられ　輝翠
躾いた子に癇高い母の聲　龍水
添へ書の二行に母の情があり　芦穗
母親は結局留守をさせられる　古憧
衝突と聞いた丈でも寒くなり　白峯
衝突へ新聞記者の慌てよう　溪谷
反則をした衝突は聲低い　狼子
手放しの自轉車遂に衝突し　正雄
衝突を聞いてハイカーの子を案じ　一兎
衝突の聲に又かと愚痴が飛び　一志
衝突の裏面に二號あるらしい　春一
衝突の場所へ証人引き出され　丹精
衝突は先づ乘客の案否から　秀甫
衝突をして醉拂ひ呑み直し　綠雨
衝突に膝から子供落すなり　秀峰
近道をして自動車は衝突し　靜峯
衝突をして酒呑みは意見され　飛窪
酒の上自慢話が衝突し　朗舟
衝突と聞いた電話に手が震へ　秋意
もう一度衝突したいよい女　翠生
衝突へ子は頑是ない事を云ひ　旗風
衝突の刹那を語る蒼い顔　芳人
衝突に笑ひ崩れるかるた取り　龍水
衝突も昔噺の仲となり　翠芳
衝突に船頭らしい怒鳴りやう　芦穗
衝突の思ひ出話寒くなり　同
衝突を笑つて濟ます仲のよさ　輝翠

阪大川柳會（大阪）　於惠濟會館　丸島利生報

六月二十六日

ごみ、素人、關、根

その塵介をあつさり捨てる川の端　君女
露路口で一聲高く芥だつせ　柳秀
債券のくらし芥箱きれいなり　同
捨ひ屋にみかんの皮が邪魔になり　春巢
繁昌は荷造りをしたゴミの嵩　同
大阪の塵芥大陽を黃ろくし　君女
ごみにまで非常時の聲屆きたり　芳一
國策は芥の仕末にまで及び　方正
塵芥溜をあさる男は仇名もち　利生
塵芥箱の置場に困る門が出來　君女
躾いた子に體操を教へられ　利生
輝翠
龍水
芦穗
古憧
白峯
溪谷
狼子
正雄
一兎
一志
春一
丹精
秀甫
綠雨
秀峰
靜峯
飛窪
朗舟
秋意
翠生

税關をずるくパスするブロークレ　同
艸根木皮へもどる愚かさ　路郎
ちんぼこを母清淨の眼で見たり　同

有恒川柳會（大阪）

雑踏、灰皿、代用品

雑踏を掃くやうに雨落ちて來た　鋭々
飛行術群集を同じ方に向け　同
ざわめきの街とは別な水を打ち　同
肩車雑踏に見る父性愛　波夢造
心ブラに早や人込を縫ふ我が子　同
今日などは雑踏すると知つて行き　至藝瑠
雑踏へ巡査も立つて見てるだけ　同
改札の人波へ土産多すぎる　鋭々
用の無いのが寄つて日曜混雑し　德二
雑踏の裏念佛の聲細し　平三
雑踏に從いて心は急がしい　同
雑踏にもまれ辨當洋傘に着け　志可
お芝居のはねに且那を見失ひ　錦浦
灰皿がそんなお世辭は聞き飽いた　鋭々
灰皿にまで若主人趣味を見せ　同
灰皿の掃除をさせる長話　同
相談が成つて灰皿だけ殘り　同
灰皿は溢れ將棋の夜は更ける　波夢造
灰皿に金口もある披露宴　同
灰皿に九分迄吸はす深思案　至藝瑠
踊り濟んで團子の灰皿急にふえ　德二
灰皿が山盛りとなり和解せず　平三
山の宿灰皿一つ置いて行き　同
庭園のベンチに殘る灰皿の煙り　錦浦
灰皿を御自作ですかといやに褒め　志可
灰皿の下に要件かいて置き　同
應接間代用品も二三置き　鋭々
代用品夫人は少し淋しさう　同
子供もう代用品と知つて居り　同
代用品買ふて現給に甘んじる　同
代用品これがいやなら止めておけ　同
代用品の價値論じてる野暮なこと　至藝瑠
宣傳が代用品にしてしまひ　同
代用品だけを知つてる子供也　同
國策に沿ふて顯す代用品　錦浦
代用品五十年程進歩させ　同
一も二も三も四も皆代用品　同
代用品と言ふには惜しい着心地よ　雨月
代用品で候と僞せ物巾がきゝ　同
座談會代用の愚痴になり　朴堂
代用品だまされさうに買つて來る　同
をかしさは鯨の靴に豚の靴　路郎
代用品たつた一日とは哀はれ　同
代用品これが博士の智慧ですか　同
代用品のストックさへも底を見せ　同
代用品の代用品が出來さう　同
代用品を賣るに商人氣が強し　同
代用品手に取るまでもなかりけり　同
スフはスフだけのものさ風呂歸り　同
靴下の穴が話題になるも憂し　同
轉して知つたベークライトの茶碗　同

口紅、作業服、簞笥

正氣とは言へぬ年増の紅の濃さ　羅漢
口紅よ白粉よ孫が稚兒に出る　波夢造
二人目の子から口紅忘れたり　同
口紅もつけず博士となつた女醫　鋭々
口紅思へらくよくも白々しい嘘が　同
けふも亦嘘言ひに行く紅をつけ　同
ルージュ濃し女鋭き口を利く　同
細卷を咬へルージュの光る唇　同
踊り子のやうな口紅母嫌ひ　同
口紅も歳相應につけてくれ　至藝瑠
口紅を繕ふ顔のきついこと　波夢造
口紅の外れたとこで物を喰べ　德二
打明ける妓の口紅を淋しまれ　朴堂
退院に近く口紅薄くつけ　同
若社長作業服着て嬉しがり　羅漢
作業服技師長らしい青寫眞　波夢造
にじむのは興亞の汗よ作業服　同
作業服起重機の夕日見て歸り　同
上役は髭だけがある作業服　鋭々
大學へまでもやりたい作業服　同
作業服の包む筋肉羨ましし　朴堂
作業服ぬげば且那で通る顔　德二
時代なり菜ッ葉服からチエリー出し　至藝瑠
荷飾りは簞笥の裏まで觸つて來　同
デパートの簞笥は手垢ついたまゝ　德二
新嫁の簞笥納戸でひかつて居　羅漢
陽に燒けた疊簞笥をどけて知り　同
子の着物だけが簞笥を占領し　同
簞笥から出せば子供は得心し　鋭々
物尺が二本簞笥の裏から出　同
馴染とか桑の簞笥の下で飲む　波夢造
嫁ぐらしい母娘簞笥に魅入つてる　同
母の慈悲知つた簞笥の小抽斗　朴堂
新しい簞笥が增えた目出度い日　同
出戻りの簞笥は藏のすみに置き　山内
シャツや足袋入れる簞笥になり下り　路郎

松坂倶樂部句會（大阪）

戸田孤蓬報

表札の主じは母の手に抱かれ　丹路
入學御禮表札をたしかめる　同
表札に坐漁莊とこそ書かれける　尙志
アジの巢は贋の表札張つてある　同
アパートの表札十把一トからげ　生々庵
探しあてた表札見覺えの右下り　同
表札に書いて我が名に一寸惚れ　角堂
表札を掛けて心で讀んで居る　同
表札を何度書くやら平八郎　孤蓬
債務者と云ふ表札の家に住み　同
表札をほめるとそれは夜店です　方正
新婚へ夜店の文字が掛つて居　美根子
金文字の表札出した女醫博士　貴志子
表札へ名譽の家の女文字　路郎
表札の名刺の一字名もさびし　尙志
目をすえてよく御覽あれ居合ぬき　同
社長の目ないと氣樂なビルディグ　同
眼の色におされうつかり腹をわり　同
ウインクにころり〳〵と何人目　同
うれしさに胸が高なる目がかすむ　同
眼と鼻の所に居つて逢へぬ仲　方正
眼の動きちと大物と感じたり　同
その眼その眼獨身者がちと怖れ　同
初戀を思ひ出してる凉しい眼　生々庵
尋常二年もう父の眼を知つて居る　同
あの眼の眼しよぼ〳〵しよぼと終電車　同
前線復歸まだ一眼が殘つてます　同
たしなめた後の母の眼忘られず　美根子
千金の眼もと一家の糧となり　同
社長より令孃のお目にとまつたのさ　同
ながしめといふ眼の技巧も知つてゐる　同
眼の外はどうでもよいといふ顏だ　白面人
見學を斷食凄い眼で見つめ　同
權利義務あの眼ぢや縋る餘地もない　同
泣きさうな眼へうろたえて甘えかせ　貴志子
一眼を國に捧げて强う生き　同
美しい生徒にヒスの眼が光り　同
全盛をあの眼に見せてさすらへり　孤蓬
一人ゐてもの思ふ眼をもちあはせ　丹路
奈良に來てよきもの見たり佛の眼　同
眼の中に女の眼だけのこつてる　孤蓬
親しまぬ眼へ犬の眼も亦とがり　角堂
眼鏡越しに敬意を表す老將軍　尙志
小切手を不安な顏で女將取り　生々庵
小切手を拜んで入れる縞財布　同
不拂ひと知らず小切手三拜し　生々庵
小切手帳まだ若且那委されず　同
明日は明日とにかく小切手渡しとき　孤蓬
先日附かいて節季の日が暮れる　孤蓬
淸書の樣な小切手渡される　同
小切手に物を云はせて鳧がつき　美根子
小切手の拂へに書けぬ彼女渡し　同
小切手にサインする手の節高く　貴志子
更生へ小切手何も云はず出し　同
小切手で貰へば萬も呆氣なし　白面人
當てにしたとこで貰つた先日附　同
小切手で家賃を拂ふいゝ生活　丹路
小切手へ二號邸へと書いてなし　方正
小切手に初めてですよと百萬圓　角堂

尼崎句會（尼崎）

兄、軍人、郊外、新家庭、ラヂオ、手、受付、雨傘、酒

兄ぢやとてこの一目は讓られじ　李太郎
兄さんの頭は古いと云ふばかり　たゞし
ダンサーは行方の知れぬ兄を持ち　南濃路
兄の方は幼稚園ですと嬉しそう　文月
宿題の時だけ兄がほしかつた　正路
出世した兄少々は高く居る　寄與史
嫂は兄が一緒で强くなり　路風
軍人の遺す言葉は九段にて　正覺坊

軍人の意氣を箒で眞似て見せ　李太郎
軍人はよいが腕白ちと過ぎる　同
軍人で暮すとだけは云ひ得たり　櫛部
征かずとも祖國を護る軍人さ　美豊
名ばかりの郊外に居て犬も飼ひ　寄與志
郊外へ居て隱棲をした心算　正覺坊
病める身の郊外に出て春を知る　たゞし
號外の眞直に行く郊外地　南濃路
初産を郊外でするインテリー　正路
郊外で煙都大阪こわく見る　南濃路
長屋でも郊外に住んでゐると云ふ　路風
公休日あれやこれやと新世帶　岡村
新家庭二階の窓から顏二つ　正路
出迎の傘に微笑む新夫婦　山内
子の出來がちと早いなり新家庭　久納
新家庭と見たか商人押かける　美豊
新家庭隣の子供使はれる　寄與史
來客へ少しあわてた新家庭　櫛部
新家庭映畫を眞似てゐる如し　同
此の雨を今朝のラヂオは嘘をつき　李太郎
ラヂオ鳴つて人の住むのを知る草家　市野
炭燒の男ラヂオに趣味があり　美豊
長尻の客へ時報の鐘が鳴り　久納
姑の意見へラヂオ、ジヤズソング　路風
テキストで出世する氣の朝を起き　南濃路
神棚と棚を並べてラヂオ置く　寄與史
女手に固く銃後が護らるゝ　醉花
手相見てあなたは金が持てません　寄與史
驛頭で親孝行に手を引かれ　美豊
相性を手相でさぐる夫婦仲　明柳
そんなことしてゐる手とは妻知らず　路風
拇印捺す手あかを恥ぢて引下る　南濃路
ピアノまで手の屆かない賞與なり　文月
受付も暇かラヂオの鳴つて居り　川舟
怪我人と受付へ來るあわてよう　同
受付で筆の頭が取れるなり　寄與史
四五日は受付までにお辭儀をし　文月
受付におしい娘の言葉なり　路風
受付に心讀まれたわびしさよ　李太郎
見てる間に雨傘賣れる花の雨　市野
くめんした傘とは知らず雨はやみ　寄與史
雨傘を新妻だいじに抱いて立つ　路風
雨傘に濡れて居ながら遠慮をし　李太郎
非常時だせめて禁酒をやりませう　たゞし
云ふまいと思つた事まで酒が云ふ　路風
酒の力かうまくゆきたり　文月

大阪鐵道病院句會（大阪）

五月二十七日　於大阪鐵道病院醫局　北川春巢報

父、肺病、簾、ボーナス、廻診　嘘川
も一つで八十才の父なりし　許斐
脱ぎ終えぬ父のズボンにまつはる子　立介
酒だけは父に似るなと母は云ふ　皮一
ふところの輕さにつれて父思ひ　春巢
父になる事が今からこそばゆし　同
長女もう父の淋しさ知つてゐる　幸路
父の死へ女と別れる事に決め　同
雜沓へ父の此の手が頼もしい　某人
子の入試發表會社休むなり　同
故郷に居て父のうがひの聲にさめ　同
洗面器父の義齒へ笑へない　同
善光寺
父と來て信濃の宿は雁の下　同
肺病となつて小說物になり　嘘川
肺病と知つて淋しく戀を捨て　幸路
肺病はそつと盃ふせてゐる　豆秋
肺病の十七八は惜しまれる　同
肺病に効く灸を母聞いて來る　春巢
轉地した隣りも矢張り肺しらい　同
子の肺を母喘息と云ひふらし　同
別莊にもつぱら肺と云ふ噂　某人
肺病へ伊豆は油繪じみた海　同
病む胸に詩があり原稿紙を捨てず　同
肺が何だ俺は働かねばならず　同
肺病かさうかで都會闊はらず　同
隅つこの簾には無い璃と房　骨減
簾卷いてアッパッパ座つてる　桐
豆腐屋へ簾からの手が買つてゐる　同
青すだれ結つた甲斐ある日本髮　嘘川
夏座敷すだれで風のあるが知れ　同
川向ひ簾はさきに夏を見せ　水虹
夏の宵簾もいゝが覗かれる　同
錢湯を歸り簾を上げさせる　春巢
簾卷く女兩眼細めたり　同
簾から見る人生が面白し　某人
簾々女住居へ西陽する　同
青簾女の嘘をきいてやる　同
簾つつて一ぺん外へ廻つてみ　許斐
ボーナス日佛の供へ一つ殖え　桐
ボーナスへ夜のネオンはよく光り　同
子澤山賞與の酒を家で呑む　同
ボーナスは折目などない札をくれ　春巢
新聞に我社の賞與教へられ　同
保險屋がボーナスよりも先に來る　嘘川
ボーナス期軍需會社の噂も出　同
ボーナスの一枚拔いて灯へまはり　某人
ボーナスを無事にもらつた灯が明し　同
廻診の度に色目が增して來る　許斐
廻診へ娘は腹をこそばがり　桐
廻診は顏より傷で覺え込み　骨減
廻診の知らせに患者あわてゝ寢　同
露拂のある部長の御廻診　皮一
廻診の時だけしよげる外科患者　同
御廻診重湯が粥に早變り　周一
御廻診お次の部屋も靜かなり　同
廻診を待ちかねてゐる親心　水虹
廻診と聞いて俄に苦しがり　同
廻診の度に言ふ程快くならず　嘘川
聽診器背にあて乍ら花ほめる　同
廻診のあとに呼ばれて覺悟きめ　久枝
質問を廻診までにうんと溜め　同
廻診へ聽くことがあり從いて出る　某人
不機嫌なのか廻診の手荒い日　同
廻診へ花が美事に替つてゐる　同
廻診の時間親類寄つてゐる　春巢

★本社の六月例會の狀況と出席者

本社六月の會は三日の夕刻から大寶寺町の誓得寺で開催された。例によつて紫香、潮花君等が詰めかけ熱心な幹事振りを發揮された。新らしい顏振れとしては李介君が海山君を案内して出席された。春巢君もこゝの會には珍らしい。最近、柳話は殆んど路郎主幹が話されてゐたが、今月から會員有志で柳味ある話をすることとなり、主幹は今月の句會の句を翌月の句會で講評されることになつたので、その皮切りに松坂倶樂部路郎川柳講座の會員、石井白面人君が支那語について興味と柳味の横溢した話をされて喝采を拍した。席題、兼題披講後、永田里十九君擔當の相撲吟があつて興をそそり十時過ぎ散會した（幹事）

出席者（順不同）

路郎・紫香・八九滿・水客・孤篷・白面人・潮花・夕鐘・李介・海山・豆秋・巨人・富士・綠雨・鮎美・葭乃・アート・かほる・頑童・萬的・里十九・紅多呂・默平・春巢・風葉の諸君。

「川柳雜誌」
菊版時代の合本
一部　壹圓五拾錢
「川雜投句箋」
一冊　拾五錢
二冊　貳拾五錢

社關係の人々（順ばらい）

主幹
麻生路郎

賛助員
池澤樂居
長谷川一徹
大道弘雄
岡本一平
長崎柳太郎
長野晴作
田中辰二
嘉納秀純
笠原路生
片岡直方
川上三太郎
亀井晨修
大谷五花村
田村孝之介
米村あん馬
高尾亮雄
篠田銀波楼

客員
鳥山一歩
沖野岩三郎
大島濤明
脇素文
谷方敏郎
生駒
川村花菱
末弘嚴太郎
浅田一
安川久留美
前田雀郎
前田五健
柴谷宰二郎
篠原春雨
姫田夕鐘
松夢裡
村崎沒食子
吉田水車
岩崎松代
岡田茉人
岩橋双虎
大形水花
丸尾潮
黒川紫香
正木水客
鳥生古弗
大西八歩
★悟郎
北山鮎美
水谷鮎
山本雨迷
岩崎柳路
寺井鉛々
中西おさむ
原史風
妹尾八九湍
須崎豆太秋
春元紀
松下小柳子
西いわを
後藤青兒
宮岡白峰
石曾根民郎
平田佐平雨
橋本波少瑠
藤岡至藜
増澄元翠
田井斗風
酒井由布陽
天野ト居

不朽洞會員
樋本緑雨
樋かぢる
高橋
福田山雨樓
西田紳
永田里十九
奥村丹路

記後

★★★★★★★★

▼百四十度だ、百五十度だ、といふ戰地の暑さのことを思へば何んでもない暑さであるが、——と云ひながら、汗を流してゐる。滑稽な話だ。

▼七月七日は聖戰記念日。酒なしデー、白粉なしデー、一榮主義等々で國民擧つて自肅した。戒橋筋の商店街も八時には完全に大戸を下ろし消燈して、街路はゾロ〳〵人が歩くばかりだ。コーヒ一杯呑む店がなかつた。どんな試練にでも堪え得られる國民は幸福だ、自肅々々の連續である。

▼前號に「一筆啓上」を書いて空襲いた岡田某人氏は本號に「貝釦」を發表して、その夢の反芻をやらうとしてゐる。愛讀をすすめたい。

▼前號の「川柳解題と例句」を讀まれた森半疊氏から「日の丸制定當時の逸話」、石崎柳石氏から「日の丸餘話」の二稿を得たことは編者の大きなよろこびであつた。

▼「川柳解題と例句」は出來るだけ簡にして要を得た解說と佳吟を蒐めることに腐心してゐる。從つて前號「日の丸」の項では水戸烈公のことは省略し、阿部伊勢守が島津公に與へた書面の中に「日の丸旗章の儀は其筋で評議された云々、「剛議一決御治定になつたから」云々の文言に含ませたのであつた。自分としてはなるべく核心に觸れた簡單でしかも興味のある解題とするべく骨を折つてゐる。しかし多忙裡の研究であるから必ずしも誤りなしとは云へないので、すんで御示教をたまはらば俳である。

▼小生の健康は殆んど常態に歸へつた。案じて下さつた方々に深謝する。

▼水銀は日に日に昇騰するであらうから、戰線の柳友も、銃後の柳友も、切に御自愛を祈る。（路郎）

▼丹路氏の肝煎りで、又、月評の集りを開くことにした。其の第一回を丹路居で開催「川柳一トト筋」が、その收穫である。

▼一路氏の「煽風機」は河野夜王氏が病中を押して特に選句されたもの、感謝の外ない。

▼岩本素人氏の「櫻間黃崖」かち金に對する認識をハツキリさせることをすすめたい。金を蔑視する人々にも、一にも二にも金ちく位の人々にも。

▼高鷲亜鈍氏が「詩人複眼」の筆を流つて更に本號から「川柳仁義」を執筆連載の運びとなつた。「岡田某人論」はその序論で

募集

第十六卷 第八號課題
七月十五日締切
（十句以內）
役人　小林不浪人選
ピンボン　正本水客選

第十六卷 第九號課題
八月十五日締切
（十句以內）
寢臺車　福田山雨樓選
洋書　長野文庫選

毎號募集
近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に淸記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價

一部　金三十錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいまして御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居々は改號等の節は旣新併記の事

昭和十四年七月一〇日印刷
昭和十四年七月十五日發行

第十六卷　第七號
（毎月一回十五日發行）

大阪市西區江戸堀上二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
川柳雜誌社
電話土佐堀（三三三三）（八一一六）
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）庄萬よし
九三會支部（大阪市）北山悟郎
函館支部（函館市）亀井晨修
高知支部（高知市）國澤春水
梅田支部（大阪市）水谷鮎美
籔川支部（島根縣）尼崎之助
鳥取支部（鳥取市）中島鐵州
松山支部（松山市）矢野虻之麿
天王寺支部（大阪市）妹尾八九湍
鶴町支部（大阪市）岩橋双虎
御池橋支部（大阪市）西いわを
松江支部（松江市）勝谷山川兒
大鐵局支部（大阪市）正本水客
西條支部（愛媛縣）荒井英賀夫
今里支部（大阪市）市塲沒食子
今治支部（今治市）馬野文庫
光笑會（大阪市）永田里十九
竹原支部（廣島縣）黑本芳泉
十三支部（大阪市）淺野牧人
嘉義支部（臺灣）宮內耕朔
兵庫支部（神戸市）三崎陽幸
廣島支部（廣島市）濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）吉田水車
北大阪支部（豐中市）黑川紫香
港支部（大阪市）多田一波
下關支部（下關市）多田方多樓
北鮮支部（淸津府）三鴨美笑
蒙疆支部（張家口）岩崎柳路

賣捌書店

（大阪）参文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市內各書店（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店
玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田賣文館（函館）
石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
昭和十四年七月十日印刷納本　昭和十四年七月十五日發行

川柳雑誌　NO・186　定價金30錢　送料壹錢

ニキビ

りとびきに

美顔水

吹出物にゼヒ此薬を

ニキビ吹出物に非常によく効きますので大評判の薬です。ゼヒお勵めしたい薬！

美容薬としても

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお肌がスッキリと美しくなるので美容薬としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫てカユイ時にもとても便利な薬！

アブラ顔のお化粧下に最適！

化粧用美顔水